

連
句

猫蓑作品集Ⅳ



序

『猫蓑作品集』も今年第四集を出すことになった。平成三年に第一集を出して以来、年々の作品の記録は、私どもの力強い足跡を示すものとして、永遠に残ることである。

今度の作品集は、昨年十一月末日締切で、歌仙四十六篇、二十韻五十四篇、半歌仙一篇、それに源心という二十八句の新しい形式のものが四篇、百韻が一篇で、原稿全部で二百三十頁分となった。第一集が百四十頁、第二集が百八十二頁、第三集が百八十九頁であったのにくらべて、飛躍的な増加であり、猫蓑会員の旺盛な制作意欲、積極性を示すものとして、まことに慶賀すべきことである。

ただ、ここで考えねばならぬことは、集った作品の量の増加に比例して、作品の質も向上して来ているかとい

う問題である。私自身はつきりそうだと断定するには、いささか、ためらわざるを得ないのではないかと思う。それには、このような作品集を出して既に四回になったという、一種のなれ、あるいは安心感が私をふくめ皆に存在するのではなからうか。すくなくとも、この作品集を初めて考えて、世に問うた時の緊張感がなくなったのは事実である。

皆さんもそれぞれの作品の中に、どれだけ新しい詩を盛りこみ得たか、マンネリに流れて易きについてはいないか。その点、もう一度、さきに出した三冊の作品集の自分の作品と比較してみることによって、今後の自分の作品に対する新しい出発点とされることができらう。私も改めて、「初心忘るべからず」をモットーとして精進して行きたいと思う次第である。

平成六年一月二十四日

目次

序 歌仙

初めて涼し

神の留守

春昼の

二百十日

野分すぎ

散りてなほ

大寒に

陶榻に

雪兎

春の土

春寒し

秋の色

月の暈

方寸の

山笠に

震災忌

東 明雅

東 明雅 捌 8

秋元正江 捌 10

浅賀淑代 捌 12

市野沢弘子 捌 14

今宮水壺 捌 16

内田麻子 捌 18

梅田利子 捌 20

大窪瑞枝 捌 22

文音 規美子・和子 捌 24

加藤道子 捌 26

金久保淑子 捌 28

神谷安子 捌 30

蒲原志げ子 捌 32

倉本路子 捌 34

桑原美津 捌 36

上月淳子 捌 38

曼珠沙華

沙羅もみぢ散る

祭馬

鉄砲百合

山茶花

石路の花

雁来紅

流星群

初懷紙

青芝や

立冬の

木の実落つ

小判草

蛸や

秋燕

花に逢ふ

秋草の

湖見ゆる

小林千雪 捌 40

米谷貞子 捌 42

雜賀遊 捌 44

坂本孝子 捌 46

文音 正秋・和弥 捌 48

佐藤良弥 捌 50

真田光子 捌 52

式田和子 捌 54

篠原達子 捌 56

下坂元子 捌 58

下鉢清子 捌 60

須田智恵 捌 62

副島久美子 捌 64

高瀬美保 捌 66

瀧川雅代 捌 68

橘文子 捌 70

長崎和代 捌 72

中島啓世 捌 74

秋出水

中田 あかり 捌 76

阿蘭陀渡る

八角 澄子 捌 78

曼陀羅図

原田 千町 捌 80

啓蟄や

東 郁子 捌 82

春立ちぬ

百武 冬乃 捌 84

二月尽

福井 隆秀 捌 86

秋の蛙

独吟 健悟 捌 88

紅葉かな

水鳥 ますみ 捌 90

竜の玉

村田 富美 捌 92

つばくろや

八代 嫺 捌 94

嘯や

山口 みづゑ 捌 96

機おとの

山崎 一恵 捌 98

源心(二十八韻)

冬紅葉

東 明雅 捌 102

旅立ち

秋元 正江 捌 104

木枯へ

市野沢 弘子 捌 106

二の酉の

下鉢 清子 捌 108

二十韻

桜桃忌

東 明雅 捌 112

秋草を

秋元 和彦 捌 114

七五三

猪子 春治 捌 116

波郷忌

今宮 水壺 捌 118

藤の豊国

岩井 啓子 捌 120

夏隣り

梅田 利子 捌 122

初懷紙

金久保 淑子 捌 124

酉の市

神谷 安子 捌 126

角切りや

倉本 路子 捌 128

流星の

桑原 美津 捌 130

椎の花

上月 淳子 捌 132

時雨忌

小林 千雪 捌 134

春一番

五味 蓉子 捌 136

秋の蝶

文音 貞子・千町 捌 138

小春日や

近藤 守男 捌 140

色変へぬ松

権頭 和弥 捌 142

芽起しの

雑賀 遊 捌 144

梧桐

坂本 孝子 捌 146

芭蕉展

佐藤 良弥 捌 148

行秋や

式田 和子 捌 150

風の辛夷

篠原 達子 捌 152

聖樹

下坂 元子 捌 154

香嵐溪	杉江	杉亭	156
牛よ鳴くな	杉山	壽子	158
椿の実	須田	智恵	160
梅雨の街	副島	久美子	162
栗きんとん	高橋	信子	164
青柿ひとつ	瀧川	雅代	166
雲の峰	武村	利子	168
秋興や	橘	文子	170
残照や	田村	満子	172
榎の実	塚本	泰子	174
炎天や	文音	紀子・恵美子・淑代	176
紫蘇の葉の	文音	紀子・良弥	178
鳥雲に	長崎	和代	180
寒木瓜や	中島	啓世	182
水母	文音	あかり・利子	184
磯菊や	橋野	代代子	186
青梅雨の	原田	千町	188
青葉	膝送り	千町・瑞枝・孝子	190
水の奥	東郁子	捌	192
冬鷗	百武	冬乃	194

青あらし	福井	隆秀	196
涼新た	細川	研三	198
黄金比	文音	健悟・淑代	200
雪解富士	本田	八重子	202
秋暑し	松田	多恵子	204
木槿垣	水鳥	ますみ	206
灯牙ゆ	文音	政志・隆一	208
立春の	文音	良子・敦子・あや	210
今朝の冬	八代	娟	212
燕帰る	山口	みづゑ	214
秋風	山田	歌子	216
年用意	文音	恵美子・秀美	218
半歌仙	瑛子・良子・道枝		
紅枝垂	真田	光子	222
百韻			
處暑といふ	膝送り	正江・好敏・千雪	226
あとがき	淑子・志げ子・達子		
下鉢	清子		229

◇
歌
仙
◇

初めて涼し

東
明雅
捌

降り立ちて初めて涼し竹の奥

羅にかへ迎ふまればと

シャーベット小さき匙を添へるらん

画集の並ぶ本棚の上

月出でていよいよ高き川の音

牧を閉ざして飼犬の世話

秋の蝶六十路の夫の恋を知り

覗くチャドルの瞳妖しき

イスラムのモスク簪ゆるミナレット

よき連れにあふ旅のひととき

体温計どんどんあがる水枕

寒弾きの音夢か現か

軒先に菟薔ぶらり氷る月

「蔵の風」てふ酒がおすすめ

そろひぶみ大関を取るあにをとと

次期宰相の候補さまさま

屋外に扇ひろげる花の舞

裏山の峯百千鳥啼く

東 所 秋 下 筒 東
元 鉢 井
郁 山 正 清 紅 明

江 舟 郁 清 舟 同 郁 江 花 郁 清 舟 子 花 江 子 舟 雅

出替りの今も残れる会社なり

藍の不機嫌 藍師不機嫌

またたびの夕餉の膳もあまたたび

伏籠には月香の漂ふ

馬駆って穂芒の原分くる女

スコットランドにひそむ青ひげ

遠くより船の汽笛のこだまする

俳誌まるめて叩くごきぶり

蒼朮を焚いて神官修業中

天女の膝の時にやはらか

小町住む小野は雲京一番地

アフタースキーそれが楽しみ

ひたすらに和紙を漉きつつ終へる身か

子供の歌ふ唱歌なつかし

次々にデイズニーカップまはり来る

なびくマフラー淡き春愁

落花霏々簪に薪投げ入れよ

あまごに朱点現はるる頃

平成五年七月二十八日 首尾

於 郡上八幡紅舟邸

同 清 雅 江 花 郁 花 清 江 花 舟 江 郁 花 清 江 雅 清 郁

神の留守

小短冊忘れてきたり神の留守

冬紅葉する石の階

鵜来て教室の児ら総立ちに

アルミ薬缶の蓋をずらして

ジョギングは月が東の頃と決め

軍手の指の冷えを言ひあひ

妻籠の馬子も食らふか栗きんとん

満員御礼城のイベント

簪引の王女の役にひとだから

厭ひはせねど実は逆玉

推薦書仲人口が身につきぬ

きやりこ琉金泳ぐひらひら

山深き精神病棟夏の月

果てなく続く π の計算

オルガンの遁走曲に聴き入りし

古きアイコンの少し傾げる

花の朝新番付の届きたり

腕いっぱい抱く猫の仔

秋元 正江 捌

秋元 正江

鈴木 千恵子

海野 海砂

八代 良子

橘 文子

同 恵子

良 砂

文 恵

文 恵

良 砂

文 恵

良 砂

恵 砂

良 砂

恵 砂

良 砂

恵 砂

恵 砂

グループ作るカメラ道楽

三重連機関車喘ぐ峠越え

燃料と言ひ酒を飲む奴

公園の鰐狩り中止焚火せん

太古の恋は棒でいち撃

宅配の判違へしが馴れ初めて

東京タワー彩のvariety

安英逝く美しき言葉の懐かしき

労働支ふ不法入国

アムールが黒竜と化し月渡る

運動会のポスターを貼り

漸寒ナウの文珠菩薩は夢のなか

当りの付いて鳴りし自販機

二十四時支払ひうける電話料

グ
ラ
ン
ジ
ェ
ル
ツ
ク
で
春
は
か
な
し
も

北倉の紫檀碁局花の散る

蝶蝶かるく絹の道ゆく

平成五年十一月七日 首尾
於 江東芭蕉記念館

きたならしいファッション

惠江文良文砂良同惠文良惠同砂惠砂文江

春昼の

浅賀 淑代 捌

春昼の阿吽の牛のうつろかな

紅梅匂ふ石の階

風つくる糊の加減もほどよくて

笛吹き鍋にふたつ返事を

山脈のうへにうっすら月の現れ

笑みし通草を提げてくるひと

芸術祭ピカソの如き絵を描かん

ハートのクインいつも横向き

嫌ひかと思へばさうでもなささうな

伊富魚釣る夢なぜか語れぬ

病棟の長き廊下に響く音

暴走族が親となりたる

夏の月にはかに酔ひしアブサント

セルのきものを軽く着こなす

中京のぼったり床几ひろげられ

撮ってと頼み並ぶおばさん

蛇いでて花の大樹に入るを見る

淀みにとまる舟の捨雛

浅賀 淑代
中田 あかり
副島 久美子
篠原 達子
倉本 路子
高橋 豊美

同 路 達 美 子 同 路 達 美 子 同 路 達 美 子 同 路 達 美 子

二百十日

故郷の母訪ふ二百十日かな

小橋渡れば淡き月影

稀観本置ける机上の爽やかに

トク時計の唐突な声

操りのおどけた振りのトウシューズ

雛罌粟の束買ひし街角

夜店の灯父の愛人垣間見て

ニッケの味の残る接吻

J R株のよりつき今ひとつ

献体申請書きかねてゐる

フィヨルドの崖の崩るる様眺め

聖樹かかげしコペンハーゲン

貧なれば寒雁撃たん月の下

澱をしづめて地酒すすりぬ

正調の追分節の朗々と

ヘアピンターン岨のドライブ

佇ちつくす満山の花吹雪く中

蛙つぎつぎ池に飛び込み

市野沢弘子 捌

市野沢 弘子

山口 みづゑ

峯田 政志

大窪 瑞枝

坂本 孝子

同 子

志 枝

志 枝

志 枝

志 枝

孝 枝

孝 枝

同 枝

同 枝

同 枝

同 枝

同 枝

同 枝

小学生よりエイズ教室

狂言の醜女孕みしふりをしぬ

愛ささやくも慣れぬ露西亞語

戦後処理金を払って謝って

つまみ上げたる熱きおしぼり

駿馬吐く息とらへたり双眼鏡

五尺の雪に挑む除雪夫

婆死んで残るいのちの蕎麦打つか

最肩の選手そつと応援

満月に吠えるゴジラの豪快に

自由律にて惜しむ秋の詩

ナウ
濃淡の後の拾の藍まとひ

宮尾登美子は土佐のはちきん

縁側に仲良く遊ぶ猫と狆

集めに來たる町内の寄附

咲き満ちし万朶の花も夢のごと

かけろふの中ゆるるふらここ

平成五年九月一日 首尾

於俳句文學館

志弘枝急枝同孝志枝孝急志急孝急孝枝孝

野分すぎ

野分すぎ一炷しほの香りゆるみけり

紅き袷紗をたたむ漸寒

月の橋釣の師匠と弟子ならん

英語CMまねてゐる児等

ダイヤモンドねずみ講とは知らず買ひ

部屋に溢れる黴の空箱

葡萄酒の栓ツ抜く音の隣より

塩辛ごゑで唄ふ追分

ハイミスの趣味はごろ寝ときめてをり

あればかけたい恋のスパイス

円高にはくそゑむなり二人旅

洗濯物は宅配にする

シベリアの凍て月のこと記す遺書

青き狐の駆ける雪原

王国の医者は立派な髭立てて

金貨ためこむ迷宮の奥

砂糖菓子ほろほろくづれ花吹雪

種播く人の影を遠くに

今宮 水壺 捌

中西妙子

倉本路子

向山真理

佐々木 有子

竹田 登代子

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

今宮 水壺

サ^サロンパス貼って巣箱を取付ける

ロツクに燃える若者の街

夜遊びも仕事のうちと單車とび

犬の散歩に猫のつき来る

魔女になる夢より覚めし海の家

エースで四番フィアンセの彼

大根もA V女優となつて売れ

仕掛けの水でびしょ濡れの髪

新刊の制服図鑑次々に

笹の葉擦れに秋のかそけさ

ひざまづく月のかげさす懺悔室

アルバム繰れば想ひ出の霧

御舟^{ナウ}描く茄子に止まりしきりぎりす

くさやむしって茶漬さらさら

鯨餅さげて訪ねし赴任先

倅にゆづる店のきりもり

棹さすもささぬも自在花筏

くねくねくねと蜷の書く文字

平成五年九月十三日 首尾
於 新宿角筈地域センター

路 壺 妙 理 代 同 有 同 妙 有 理 路 有 理 代 妙 路 理

散りてなほ

庄司美代子氏歌集出版を祝して

散りてなほ紅奢る山茶花よ

炬開きの宿集ふ友垣

合唱の声響きくる寒風に

パウンドケーキふつくと焼け

ムーンライト森の小人の踊りの輪

雁の棹わたる湖

実^ワ不知の柿送ったと便り来て

初恋のひと今は六十

外車購ひ息子ひたすら彼女乗せ

ゼネコン騒ぎ雲の上なる

楽屋雀皇族ファッションかしましく

包みの如くうづくまる猫

書きなづみ締切迫る夏の月

臍打つ団扇父のなつかし

広重の版画の江戸はこの辺り

レインボーブリッジ渡る少年

花霞寺院の塔を遠く見て

羽根の枕にのどらかな夢

内田 麻子 捌

庄司美代子	内田麻子	五味蓉子	須田智恵	高瀬美保	八角澄子	長谷えみ子	瀬木志津	塚本泰子	恵蓉	澄津	美津	蓉	麻	泰	恵
-------	------	------	------	------	------	-------	------	------	----	----	----	---	---	---	---

干潟^{ナギ}には睦五郎飛ぶ昼下り

工房に彫る桐塑人形

何時しかに酒量増えゆく女記者

炒めこんにゃく胡麻をまぶして

耳もとに愛語ささやく息熱し

西班牙ダンステンポ激しく

未婚なる母の娘も世に出でぬ

民族文化広めゆく旅

三寒にコート着るひと着ないひと

ホームレス達デモ映される

露天風呂幼児も居る山の月

どんぐりころころ落ちるお池に

毛槍^{チウ}投げ時代祭りの長き列

テレホンカードたまる弗入れ

カプチーノ肉桂の棒の香り好き

春の火鉢のとぼる宿直

薄墨の花咲く里の村おこし

芋虫蝶になつて野原へ

平成五年十一月二十五日 首尾
於 鶴巻温泉陣屋

保 津 え 保 同 恵 麻 え 泰 津 え 蓉 澄 蓉 泰 美 麻 澄

大寒に

梅田 利子 捌

大寒にどんと突かれて走りけり

あつといふ間に過ぎる一月

壁暖炉頬に炎の映ゆるらん

バードカーブの羽を彩る

有明の上弦落つる山の端に

くつきり並ぶ墓塚の影

角伐りの鹿組み伏せし腕なり

かくなるうへはなべておまかせ

想夫恋今はピアノとピアノにて

ドナウの古城魔女棲むといふ

とめど無く歴史の恨み同胞戦

溽暑の月に聞きし産声

下町の露地裏づたひ金魚売り

競う半七・佐七・伝七

自費出版ワープロの文字そのままに

市議選にらみ愛想ふりまく

咲き切つて花舞ひ散るを待つばかり

折り鶴かけし地藏かぎふ

梅田 利子
坂本 孝子
金久保 淑子
杉内 徒司
神谷 安子
小林 千雪

孝司 安孝 雪孝 淑司 孝淑 淑司 淑司 淑

す
囁りの縁に午睡を貧れる

盲の打てる琵琶の平曲

識字率上げてアフリカより帰り

五臓にしみる直会の酒

麦の芽を少し湿らせ片時雨

星座冴えたり漁火の天

緋縮緬よべの男を忘れかね

夢の境に又触るる肌

我を捨てて寝たきりの姑看取る嫁

早仕舞する角の駄菓子屋

湯の町の蜩に月誘はれて

句帳に記す去来忌の吟

す
松茸の香りばかりを飯に炊き

都会のごみに太る野良猫

万華鏡めぐる世界のエンドレス

幼稚園児の放つ風船

甘樫の丘に登れば花霞

合格通知受けて春闈く

平成五年一月二十日 首尾

於 深川芭蕉記念館

安孝司 安孝司 同安雪 淑雪 孝司 淑雪 安利司

陶榻に

陶榻にマラルメ伏せる晩夏光

庇をかすめ啼ける郭公

作業服里の越瓜括るらん

袋のままでつまむばら菓子

月見するルームメイトは留学生

ひと方はづしまだ残る蚊帳

金刀比羅祭歌舞伎へゆるき坂上り

心の褶に罪なながしめ

ナルシストばかりで恋は無精卵

事後処理だけで課長昇進

新生党日本新党さきがけ党

腰にかたかた万歩計鳴る

九八亭ちよっと一杯寒の月

挽馬レースに村の賑はひ

宮様をまんなかにしてはいチーズ

古代史講義通ふ女子大

老いぬれば今年ばかりと花仰ぎ

蚕棚にしばし眠るおかいこ

大窪 瑞枝 捌

大窪 瑞枝

米谷 貞子

原田 千町

市野 弘子

佛淵 健吾

同 千

貞 同

千 健

弘 健

貞 千

千 健

同 貞

貞 同

同 貞

同 貞

同 貞

同 貞

弘 同

陽炎のドライブショット振りぬいて

お鼻の疣をなでる僧正

由緒ある四耳壺を飾る宴の間

ラインの古城雪の降り積む

逢ひびきの深々被る冬帽子

魔に魅入られて弄ぶ銃

参謀は統帥権を壟断し

行方も知れず高梁の風

蓑虫の居待の月に揺れをりぬ

そつと脱ぎ置く露の庭下駄

五平餅歯形比べる妻籠宿

遺言状は抽出の中

孫、曾孫、玄孫持つも夢ならず

コードレスフォン使ふ楽しさ

サミットの報に相場は買ひとせん

ばらもん風を空と綱引

むつごろう干潟に花の散り混り

のどかに潮の寄せる舟端

平成五年七月七日 首尾

於 国分寺米谷邸

千 健 貞 千 弘 同 千 弘 同 千 弘 同 千 健 瑞 弘

明治座の柿落しへ弥生尽

国際線はいつも満員

靴底に麻葉かくして悠々と

高級マンション赤児チャの声せぬ

カーテンのかげ年越しの蠅のゐて

柚子の香りの匂ふ蓬萊

おまへだけなどと言はれてついほろり

炙り出された道ならぬ恋

のうぜんの咲き満ち鬼女の面の色

夜長ひそかに叩くワイプロ

望の月丸谷才一ほくほくと

幼馴染と交はすどぶろく

還曆ナに万里の長城踏破せん

あれこれ選って買ったステッキ

代書屋の看板いまは司法書士

音ずれて弾く孫の練習

黄昏に何焚くならむ花の庭

キャンバス淡く描く初虹

平成五年一月二十四日 起首

平成五年七月五日 満尾

美 和 美 和 美 和 美 和 美 和 美 和 美 和 美 和 美 和

春の土

一心にボール蹴る児や春の土

入学試験合格の報

桜鯛宅急便で運ばれて

筆先そろへ巻紙に文

望の月呉服の店の藍暖簾

目覚ましなりて虫の声やむ

挨拶の爽やかに行く歩道橋

おさげソバージュおかつぱの娘も

OLのタテヨコナメ恋模様

塵も包める風呂敷の良さ

割信に金の延べ棒すぐ貯り

地獄極楽お気に召すまま

じゃじゃ馬の鞍に仰げる夏の月

ビールいっきに髭に付く泡

深淵に船人誘ふローレライ

電子音にて琴の合奏

花の下小面の笑み幽かなる

薄き明りの揺れて朧に

加藤道子捌

加藤道子

松田多恵子

田村満子

蒲原志げ子

橘文子

本田八重子

八

文

道

満

志

文

志

多

文

志

八

志

春寒し

金久保淑子 捌

春寒し音たてまはる風速計

いぬふぐり出ず庭の片隅

雛飾る母娘の会話はづみゐて

座敷簾を新しくする

虫狩りにふと見上ぐれば月の舟

浜辺で囲む鯊のてんぷら

国体の優勝賜杯どっしりと

お忍びばれてぱっとフォーカス

両天秤かけて失ふ苦い酒

一心多助に彦左耳うち

新党が地方でもてる選挙戦

行こか止めよかモザンビークへ

調教を終へし厩舎に汗拭ひ

軒をかすめる月のかはほり

伝説の鬼住む里の石祠

子をとろ子とろかたくつなぐ手

花の枝透かして空の奥を見る

ロープウエーに陽炎のゆれ

金久保 淑子
加藤 道子
本田 八重子
橋野 代代子
蒲原 志げ子
松田 多恵子

志 同 道 代 多 志 八 代 八 道 多 志

うらなる旅の鞆に時刻表

都会にふえる独居老人

CMの紙のおむつが気にかかり

諸行無常と寺の鐘なる

小酒盛量も替へて御機嫌に

年賀に配る「さるや」黒もじ

にっこりと名刺の端の顔写真

ホストクラブで競ふナンバー

あの娘には値引きマダムに貢がせて

結婚までは清き交際

澄める月富士の高嶺の皓々と

鍵となりゆく雁の列

ち
搬入の絵に筆入れるそぞろ寒

ブレンドコーヒーマイセンで飲む

公開の明治洋館シャンデリア

小窓洩れくるかの円舞曲

爛漫の野点の席の花衣

金平糖が膝にのどらか

平成五年二月二十六日 首尾

於 鎌倉おんめさま

八多道志同淑八志多道志八多代淑八代淑道

秋
の
色

鯉跳ぬる汐入池や秋の色

立待の月待てる人影

つくねいもあたる播鉢やはらかに

発表会をめざすレッスン

ベランダに山脈望む西洋館

燕の雛の育ちゆく軒

旅心誘はれ買ひし時刻表

社長と秘書の顔で連れだつ

マニキュアと唇の紅びったりと

ロボトミー受け今や全快

塞の神鎮まりおはす島の村

父の将棋がやっと終れる

ページ力に薪くべゐる窓に月

銀のちろりを埋め熱燭

宰相の英語演説流暢に

弗が安いと届くファックス

トンネルの中に舞ひ込む花吹雪

遠足の列帽子おそろひ

神谷 安子 捌

神谷安子

雜
賀
遊

下坂元子

百武冬乃

久保田 庸子

村田 富美

遊

美

元

遊

乃

庸

元

遊

乃

庸

美

乃

農具市切れ味の良き鎌見つけ

窯変するき信楽の甕

一族は長脛彦の裔にして

貧乏ゆすり福を落しぬ

ジョギングの朝な夕なを蚊に刺され

野伏間のとぶ大杉の梢

天井に妖かし棲めるてふ噂

隠れて通ふお局の部屋

僕ならばスキャンティでも洗ひます

ブラックコーヒー香り漂ふ

月皎々五百羅漢を照らしをり

高きに登る階を斜に

爽やかにナナハンを駆る若き群

嬰鑠として語る浄瑠璃

紀の国の川の流れの豊にて

春泥踏んで抜ける裏庭

招かるる花の宴の祝ひ膳

絵風字風の右に左に

※ ロボトミー

精神分裂病の外科的手術の一種

平成五年九月二十九日 首尾

於 源心庵

美 安 乃 庸 元 美 遊 庸 元 遊 庸 美 元 乃 遊 乃 元 庸

月の暈

蒲原志げ子 捌

台風の報せつぎつぎ月の暈

ちちろ鳴くなり土間の片隅

大粒のマロングラッセテーブルに

児等おとなしく膝をならべて

除幕式主催者立ちて御挨拶

折り目もびたり麻の白服

街角に海酸漿を母と買ひ

バイク飛ばして彼と湘南

弁財天ジェラシーの琵琶かきならし

寺の和尚は揮毫三昧

掛け替へる五言絶句は時代物

酒がたりないお前どうする

月昇り鮫鱈鍋も煮ゆる頃

髭を焦したかじけ猫ゐる

コカインのむくい囚屋にかこちつつ

ルポライターは危険侵して

まほろばの山辺の道花巡り

人麻呂しのぶ陽炎の中

蒲原志げ子
田村満子
本田八重子
萩原てる子
橋野代子
橘文子
加藤道子
松田多恵子
高橋信子
金久保淑子
志満子
て八文
代多
道

ナ
オ
囀りの校舎は窓を開け放ち

始業の鐘に走るガクラン

コックリサンやはり集まる同好者

景気回復かざす内閣

濾過装置熱砂の国に指導する

日射病には保険もらへず

カルメンのタクトを振りし暁の夢

悪女の肌に魅入られて行く

懐に贗の小指を数多もち

あげたあげない名簿混乱

弦引けば的上なる望の月

瓢を描いて市展特選

オ
冬隣りもやひの舟の朽ち果てて

幼馴染みと競ふケン玉

駅弁の蓋に付く飯丹念に

両手に重き家苞は何

咲き誇る花に言葉の空しかり

春の障子にやはらかな影

平成五年九月十七日 首尾

於 鎌倉おんめ様

淑 信 志 満 八 代 文 道 多 信 淑 満 八 代 文 志

方寸の

倉本
路子
捌

方寸の籠の邯鄲もらひけり

真緒まおの薄撫うすなででる潜り戸

雲もなく風なき月に誘はれて

留守番電話入れる伝言

テキストのドライマティーニ仕上りぬ

ホームステイでヨット快走

島々ウは土用太郎の日和なる

幼馴染みの今も住む家

逢ひに行く秋篠寺の恋仏

紹介さるる母のいいひと

バーゲンのブラウス着れば丈短か

流るる年の紅毛の月

関東煮はんぺん・つまれ・焼豆腐

半透明のごみ袋買ふ

遺伝子の疵でみつける早期癌

震度四とか玻璃の人形

花散ってまっ平なる池の面

かくれんぼの鬼つつむかげろふ

倉本 路子
秋元 正江
小林 千雪
水鳥 ますみ
真田 光子
村田 富美

江美 光子
み 光
美 光
光 美
み 同
雪 江
美 美
光 美

ナホ
春愁の消してまた引く設計図

音量しぼり「悲愴」聴きゐる

埃及の古代の猫は耳を立て

胡座かきたる帰国子女たち

しなやかにダンスクラブの学園祭

ポルシェに残る淡き香水

父親を知らぬ同志の堕ちるさき

しばれる海峡越えしふるさと

獄中の春樹七十二句を詠む

カレーライスかライスカレーか

月中天有楽町のコップ酒

敬老の日は外出の姑

ナウ
夷切れまた収集の癖を出し

塩分濃ゆき山の温泉

読みさしの推理小説夢に見る

針魚を糶にかけるトロ箱

久に逢ふ友みな若し花万朶

うなりを負へるばらものの風

平成五年十月十二日 首尾

於 文京区勤労福祉会館

江 光 雪 み 雪 み 江 同 美 光 江 み 江 美 み 雪 光 路 美

山笠に

桑原 美津 捌

山笠に浴びせかけたり勢ひ水

声もかれよと炎ゆる町中

なでしこを玻璃の器に活かせるらん

百科辞典をめくりある子ら

クルーザー旅のはじめの望の月

どの窓からも覗く鯖雲

秋爽^ウの粋に表着を羽織りたる

プレーボーイの磁力強烈

ジュリアナのお立台から見つめ合ひ

ひざまづいては拾ふ賽銭

金色の斑猫跳べる無住寺

宙に浮いたる村おこし策

月織く慈姑煎餅ワイン酌む

滑って転びスケートの初歩

恐ろしき社長・先輩・御同役

男女同権叫ぶ男性

花吹雪吹き寄せらるる庭の隅

風船ひとつ青空に浮く

山 村 滝 八 桑 雑
崎 田 川 角 原 賀
一 富 雅 澄 美

恵 同 代 恵 遊 澄 富 澄 代 恵 同 遊 恵 美 代 子 津 遊

笏^{ナカ}なくし親王雛の腕あはれ

渚に築く砂の楼閣

副総理担ぎ出さむと躍起なり

ふつても出ない空の徳利

信楽の里の辻々狸佇ち

キャラメルとガムキオスクで買ふ

唇を合はせし頬の泣きぼくろ

心中仕立てで旦那五人目

海底より媚葉秘めたる明の壺

めりはりきいた細身願望

月影を共に眺むる雁の棹

秋の岬にカメラ据ゑ置く

冷^{ナカ}まじき戦火をふつと思ひ出す

鉄道唱歌友とうたひて

ご自慢の大き魚拓を壁にかけ

社日は近き陽ざし和らぐ

ジョギングの家族揃ひて花堤

浅蜷飯など詰めし辨当

平成五年七月二十八日 首尾

於 源心庵

遊 富 澄 代 同 遊 富 代 津 遊 恵 富 恵 澄 富 澄 津 恵

震災忌

上月 淳子 捌

赤き星一つ流れぬ震災忌

ビルのあはひに仰ぐ宵月

栗鹿の子名代の味を賞味して

丸高杯の塗のつやよき

締切のせまるエッセイ渡し終へ

渋きチェックのジャケツ新調

芝居はね落葉降るなかお濠端

すれ違ひざま肩さはる奴

お茶漬にあきて不倫のフルコース

あわてなさんな長い人生

真っ逆様どん底鍋底二番底

受話器のむかふ雷の鳴る

昼の月匂ふ茅の輪をくぐりけり

町会長が寄附の角樽

入れ替はる与党野党の落ち着かず

手持無沙汰の口笛を吹く

このあたり艇庫なりしと花の川

泥んこ遊び夢中なる春

上月 淳子
篠原 達子
中川 哲
雑賀 遊
米谷 貞

子 遊 貞 達 哲 遊 貞 哲 遊 貞 達 貞 達 貞 達

た^すんば^すの絮妖精のこもりゐて

刺繡糸組み作るミサンガ

ニューヨーク肝臓移植待つベッド

故里の雨車窓くもらせ

山峡の小径けはしく岩燕

昼寝の果の半夢半醒

われながら呆るる間夫の隠し技

嘘のつけない白いエプロン

立読みの後姿の誰ならん

老眼鏡を掛けて鳩杖

鉦叩き傾く月を惜しむごと

壁のピエロに秋意そこはか

どこ^ままでも吾に付きくるゐのこづち

馬籠妻籠を母と訪ねし

地魚に合ふ辛口のロゼワイン

谷から谷を結ぶ初虹

ひざまづく御仏の前花散りて

混声合唱うらかの午後

平成五年九月一日 首尾
於 俳句文学館

達 淳 遊 哲 達 貞 遊 同 哲 遊 達 哲 遊 哲 貞 達 淳 貞

曼珠沙華

昏れなづみ炎むら消ゆるや曼珠沙華

ころにかかる明日の月の座

秋鯉さばく手付きのあざやかに

開店サービス寿司屋満員

横断の誘導メロディー流れくる

蛩籠提げ家路急ぎぬ

目線合ふ鏡台の人ほほゑみて

嫂まぶし少年の恋

万巻の書を尋ねれど答なし

山の奥処に碧深む淵

待ち居りし笹碁の友の声のする

大きな丸を日記初めに

石舞台月さえざえと渡るなり

「鬼の雪隠」「鬼の狙」

馬盥で酒呑童子のいっ気飲み

セ・パ両リーグ勝敗をかけ

パレードにかけよってゆく花衣

去年採りて来し化偷草咲きそめ

小林 千雪 捌

小林千雪
八角澄子
上月淳子
篠原達子
真田光子
須田智恵

雪子 澄子 淳子 達子 光子 恵子 淳子 達子 光達 淳子 澄子 達子 淳子 澄子 恵子 淳子

ほかほか弁当おかず取替へ

イタリア汚職真似る日本

せんべい布団誘ひ込めども

夢てふ一字青墨で書く

杜甫・李白・西行・芭蕉旅に死す

BGMは「雨だれの曲」

月代に灯す灯籠背のびして

村に年寄り増えてやや寒

芋煮会飛入り歓迎鉢巻し

空缶蹴って石につまづく

ポスターはちぎれたるまま地下道に

くじの売出し長き行列

弘前の北限の花出会ひたり

紙飛行機をとばすうららか

平成五年九月二十九日 首尾
於 源心庵

惠雪達澄光淳澄淳惠光惠光淳達澄淳光惠

沙羅もみぢ散る

沙羅もみぢ散る小流れや国分寺

布目瓦に冬陽あたたか

太梁に寒鰯の腹吊すらん

鸚哥の餌を掌でやる

人どつと吐いて吸ひ込む駅に月

本二三冊かかへ夜学子

新走^ウりJリーグ入り祝ひをり

歡呼にまぎれ盜まれし唇

たかぶりは束の間なりし耳飾

海の教会ひとりぬかずく

ふるふるとコーヒーゼリー銀の匙

墓つるみをり月の光に

丑みつの党首会談決裂し

鍵を紛失蔵の番人

十条の家訓を伝ふ老舗継ぎ

年中行事ローマへの旅

フェリーニの柩は花に埋もれて

指を放れし赤き風船

米谷 貞子 捌

米谷貞子

大窪瑞枝

山口みづゑ

市野沢 弘子

梅田利子

同

枝

同

五

弘

枝

2

利

同

枝

五

枝

弘

眠る児を背負ひて集ふ労働祭

携帯電話きりもなかりし

営業と現場は何時にもかみあはず

輸入パイヤかなり熟れすぎ

スリットの脛美しきチャイナ服

鏡に映る恍惚の刻

山の宿凍裂に夢結ばれず

遙か地平に燃ゆる狐火

柝の入りて見得決まりたる高麗屋

大あぐらして扇風機浴び

宵の月故郷いでて幾年か

ベカンベ祭りすたるアイヌ語

穂すすきに泡立草の黄のまぎれ

寝たきりなれど世話やきの刀自

テープでも源氏講義は須磨がへり

蝶の版画のかかるリビング

しつらへし流鏑馬の馬場花万朶

春を惜しみて眺む浮雲

平成五年十一月十七日 首尾

於 俳句文学館

弘 貞 弘 枝 弘 弘 利 弘 弘 枝 弘 枝 利 弘 利 枝 弘 利

祭馬

嘶きや勇み立ちたる祭馬

神の花の香る参道

メロン切る麻のナプキン純白に

ジグソウパズル飽きし子供等

風一陣水面の月のゆらめけり

螺旋の階に追ひし流星

菊^ク姫の名に負ふ酒に秋惜しむ

滑りおちたる衣通りの衣

エルタンゴバンドネオンに肌燃えて

触らなくてもセクハラになり

先進国首脳会議の重警備

贗の金貨は嚙んで見分ける

月凍てて巧みに描く絵蠟燭

梟の声凄き裏山

乱歩賞候補に終る幾度か

前垂れの膝折りて茶を碾く

花舞ひて床几埋むる下醍醐

ドライブスルー人も臍に

雑賀

遊捌

雑 加 遊

下 坂 元 子

坂 本 孝 子

山 口 みづゑ

上 月 淳 子

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

孝 淳 孝 淳 孝 淳

目借時手持無沙汰の美容院

私服刑事のひそむ電柱

母恋の幼児体験世を拗ねて

パイオに凝りてトマト培養

端ほどけ思はせぶりの落し文

男嫌ひの筈でありしに

病得し運河のほとり私娼窟

バロック教会クルス高々

栄転の単身赴任四年越し

孫に伝へる八木節の月

思ひきりバイクで駆ける葛の原

木の葉山女の焼目こんがり

方丈の畳の広しそぞろ寒

父送りたる胸の虚ろに

大言海机の角に揃へ置き

ブラックコーヒーマイセンの磁器

満開の花のグランド均されて

写生の筆を洗ふ永き日

平成五年七月七日 首尾

於 米谷貞子邸

同 孝 同 同 淳 孝 元 淳 孝 孝 元 淳 元 孝 孝 遊 忍

鉄砲百合

照り降りのあさき愁ひや鉄砲百合

顔振り向けば既に八朔

クロールの息つぎ覚え来しならん

ポテトチップの少ししめりて

茸狩の籠軽きまま月昇る

茶立虫聞く民宿の土間

芸^ウ術祭飛鳥の佛玻璃ごしに

口づけしたきあの手あの指

火遊びの好きな貴婦人高くつき

暗号名をカナリヤといふ

コカインのアンデス越えてゆくルート

月光蒼く瀑布凍てたり

鬼打の豆で大事な歯をこはし

まんざらでなし猫缶の味

こはそれヒューマニズムのボランティア

英字新聞読んで聞かせる

鼓笛隊花の並木を堂々と

瀬田の唐橋爛けてゆく春

坂本孝子捌

坂本孝子
豊田好敏
佐藤良弥
大窪瑞枝
海野海砂
下坂元子

子敏 枝敏 砂枝 弥敏 砂枝 同敏 砂弥 元敏 同敏

棹突いて吾が影ゆらす蜺船ナミ

総理決めるも時の勢

かりそめの少年となる同窓会

「夢」てふ酒はギヤマンに盈ち

胸元に恋の勝者のエメラルド

百夜は過ぎていそいそと来る

あかなめも座敷童子も覗く部屋

イラストマップブリュックより出し

助産婦の半生町の人間図

原爆落とし狂ひしと聞く

望月の斑を撫づるかに雲走り

柱廊高き秋の聖堂

下り鮎塩ナウをうたれて平鍋に

強き訛の半ば判らず

終電を告げるホームに仰ぐ星

ディートリッヒの映画また観て

角帯の殿方に花散るもよし

暈清しき炉塞ぎの後

平成五年七月三十一日 首尾

於 緑華亭

元 孝 弥 砂 孝 砂 元 弥 孝 枝 元 敏 孝 枝 弥 砂 同 元

煌々^すとパイオで創る赤っ腹

ヒントを探す横文字の本

こりゃなんと同じ割信買はさるる

塀の中なり元の木阿弥

八甲田風ばうばうと雪女郎

まやかしの経寒に入りたる

美酒抱え急いで戻る友の部屋

知らぬは亭主知るはのら猫

束ね髪衣桁の襦袢つつと落ち

景気不景気にもならず

山峡へ車列成し月のこる

無駄な骨折茸狩りとは

秋^まの虫七賢人の品定め

終の棲み家に墓を建てたり

今日も又ピッコロを吹き大道芸

両手草餅頬ばりし子等

川岸に床几並べん花の屋

鳶の舞へる街ものどらか

平成五年十一月二十九日 満尾

秋 弥 秋 弥 秋 弥 秋 弥 秋 弥 秋 弥 秋 弥 秋 弥 秋 同

石路の花

石路の花心ぞうだめしの坂に濃き

空に続ける冬風の色

畳替へ終へてこだはることもなし

洪茶にそへし羊羹の味

はたはたを子の追ひつつもつかまらず

取材の記者の憐寸する月

芸術祭思ひがけなき受賞なり

旅の岬の突端にゐて

停止線止まるか行くか君と僕

昔の女の思ひ切りよき

熱さまし処方得意で流行る医者

和金・蘭鑄・きやりこ・琉金

夏神楽月を仰いで打つ太鼓

複眼で見る世相あれこれ

地下道で行き来の人足眺め

漬物送るふるさとの母

初花を単身赴任の寮にゐて

物価騰貴で亀も鳴き出す

佐藤 良弥 捌

秋元正 遠藤央子 野崎守英 椿崎紀子 佐藤良弥

江子 英子 紀弥 央子 江英 紀英 央子 江英 紀英 同 央

春時雨くもりガラスを濡らしゆく

ディズニールランド孫にせがまれ

倫敦つこ大道芸で売れっこに

臨時講師は冬枯れの中

ハーレムの薔のぞいてすぐ閉ざす

千夜一夜の夢魔のささやき

冷し酒去りゆく時は去らしめて

先の総理の好きな味噌豆

山陰の本陣といふ宿りなり

マウンテンバイク傾けしまま

いざよいの月に漂ふ地上人

白秋の忌に唄ふ童謡

千^チ振りを引けばこの頃すこやかに

画帖かかへしJALの乗客

浮きあがる大海原に涯もあり

春燈とほく近く灯りて

懐に花二三片迎へ入れ

すぎる働く土われも踏む

平成五年十一月二十七日 首尾

於 伊豆・弓ヶ浜朝日休暇村

江英央江央江英紀江英紀江英紀江英央江英央江英央

雁来紅

真田光子 捌

雁来紅胸の高さに燃ゆるなり

淡く泛かびし峯の受け月

深秋のフルートの音の響くらん

細巻煙草ひよいと取り出す

撫でてやる猫語を解するあるじにて

風通しよき路次に遊ぶ子

晒井^ッの向ふ三軒両隣

アラブの王にプロポーズされ

黄金のくさを幾重足にまく

麻薬を飲んで悦楽の夢

利の薄くめべり激しいきのふけふ

捕鯨再開遂に宣言

月更けて祖母の蕎麦掻きなつかしき

微醺をおびし直会の杯

美術館・文学館に公民館

ディバック負ひペンを走らす

ナナハンを停めて憩へり花の下

静かな入江和布干されて

真田光子
秋元正江
水島ますみ
倉本路子
小林千雪
村田富美

み江同路み路み美雪美雪美み

こつてりと眼張の煮つけ盛りし皿
作家稼業もや々と賞とる

かしましいばかりで外野役立たず

爆笑面に蒔蓄のひと

ほろ酔の踏みしだきゐる初氷

冬の苺はフレームの中

義理立てのお見合城の抜け道で

美女と野獣の熱き抱擁

ぴいと鳴る留守番電話すぐに切り

鍵っ子爺と自称して老ゆ

クレーター月の表の皓々と

虫百態の邯鄲の形かた

さはやかに移動劇団勢ぞろひ

肥後の訛に惚ぶふるさと

酢醬油をかけしおきゅうと磯の香す

沓履きなれし若き神官

花あかり出窓に吊るす筆の束

山村暮鳥春を讃へる

平成五年九月二十一日 首尾

於 文京区勤労福祉会館

美江 同路 美江 雪美 雪美 同路 雪光 路

流星群

流星群待ちをり酒は緑色

眠い子あやす山の端に月

秋拾正しき姿勢そのままに

ドアをパタンと助手席に乗る

場所割りのつつがなく済むブックフェア

九年母の香の満つるひととき

夕霧忌鬢下地はおもやひに

人見知りする妻は物陰

気になって話の続き忘れけり

殿様総理に期待半分

大時計少し早目に鳴り出しぬ

帰省ラッシュで街はひろびろ

蘭鑄に声をかければ月覗く

聞き捨てならぬ第三の留め

井波町黒髪庵に集ひして

行き止まりなり低き生垣

どよめきの碁の渡る花の馬場

いつの間にやら癒ゆる春風邪

式田 和子 捌

佛 海 辻 式
瀧 野 田
健 海 アン
悟 砂 ナ

悟 同 砂 悟 砂 悟 ナ 悟 ナ 砂 悟 子 ナ 悟 子

イースターロシア正教復活し

原発の穴埋める兵士等

好きほうだい伸びるる罌粟に負けもせず

獺盗む宿の灯火

息荒く乳まさぐりてくるは誰そ

肩の菌形に残る移り香

「短命」の咄一席とりをとり

満員御礼スキーバス行く

いっせいにフォッサマグナでカメラ出す

入内雀ぱっと飛び立つ

鈴なりの枝豆をもぎ月迎ふ

半の目ばかりつづくやや寒

美術展父は安きにつかぬまま

夢いろいろと還暦の宴

五百米掘れば湯が出るおらが村

スプリングハズカムと教室

靄ひたる空には花のシルエット

蝶の静かに生るるひととき

平成五年八月十三日 首尾

於 桃径庵

ナ 子 砂 悟 ナ 悟 砂 ナ 子 悟 ナ 同 砂 悟 砂 ナ 悟 ナ

乗^ノつ込みのことを言ひ合ふ分庁舎

ママさんバレーきまる対戦

レンタルで父さん借りる日曜日

面をはづせば裂けてゐし唇

碑に雨脚しげくなりゐたり

紅葉残れる過疎の村里

ペーチカに恋の種火を育てつつ

フレッシュギヤルのハート買ってよ

季節ごと水子供養の帽を替へ

家苞にする銘酒吟醸

桂男のあばたくつきり見ゆる宵

エリックサテイ低きうそ寒

ライデン^{ナウ}の跳ね橋わたりさはやかに

画架ぶら下げてさまよひし日日

故郷の名誉市民に選ばれて

うからやからの宴たのしき

花万朵神馬は高く嘶きぬ

三宝柑でぼっけふくらむ

平成五年一月二十日 首尾

於 深川芭蕉記念館

悟 達 光 啓 悟 世 啓 和 清 和 達 清 世 悟 和 光 啓 悟

青芝や

青芝や置かれて小さき乳母車

薄暑の汀羽搏ける鳩

曝書する書齋の本のきりもなし

パイプくゆらし淹れる珈琲

月今宵苑に人々集ひ来て

秋声しきり旅を誘ふ

城崎の外湯めぐりのさはやかに

ブラシをかける黒牛の艶

ジープの長脰ひよいと柵を越え

耳に囁く息のかぐはし

録音は証拠の品と秘めておき

うしろの正面鬼があるなり

寒月に墨絵ぼかしの杉の鉾

氷下魚むしりて酒は辛口

高速路父祖三代の渡りぞめ

カリヨン時計ピエロ笛吹く

ポトマック河畔に花の爛漫と

風船売りの帽子あみだに

下坂元子捌

下坂元子
須田智恵子
金久保淑子
篠原達子
山崎一恵子
桑原美津

子恵子 子淑子 子淑子 子淑子 子淑子 子淑子 子淑子 子淑子 子淑子 子淑子

古裂好きあるじ抱へる春火桶ナホ

葉簞筥に常備葉入れ

丸屋根のニコライ堂は坂の上

デイバック背に学生成群

阿蘇夕焼け測候係交替す

薄翅蜉蝣灯により

言ひ出せばどつと涙の地下茶房

扉のかげのジェラシーの妻

極彩の秘戯図の絲の縋れたる

砂漠化すすむ水の惑星

仰ぎ見る月に影ある磨崖佛

ふるさと偲ぶ焼栗の味まち

黄落の街に流るるイブ・モンタン

テニスコートに沸ける歓声

鉛筆を削りかきつくぐけふのこと

新聞配達いつも定刻

花吹雪舞ひかかりたる長屋門

土産に貰ふ細螺おはじき

平成五年五月二十六日 首尾
於 源心庵

淑 元 一 美 智 淑 美 智 達 元 一 達 一 同 智 淑 一 淑

立冬の

立冬の風の棲みつくブラタナス

ふはりと頬に触れる綿虫

姉妹連弾曲のなめらかに

誰が描きし壁の水彩

改札を抜け月白の道となる

鼯鼠の勝ちぬけふの秋場所

二合半うこなからの父の脊は裂鱗

腕に残れる古き傷痕

女偏どの字も悲し書き散らす

ドゴール空港デイトするひと

ささやきはまたもウイル・ユー・マリー・ミー

祭神輿におどる鳳凰

夜濯のしばらく仰ぐ軒の月

レインボー橋シャッターを切る

落合さん長嶋さんはどうなるの

誤解埒外報道の常

置かれたる埴輪の馬に花吹雪く

公園の前しゃぼん玉売

下鉢 清子 捌

下鉢清子
原田千代
浅賀淑哉
佐藤良哉
真田光子

子代町哉光代町哉光代町哉光代町哉光

山独活に味噌つけ食らふ里暮らし

般若の面に見下ろされをり

プライバシー総攬ひしてパッカー車

形状記憶のワイシャツが売れ

函館の単身赴任馴れました

銀盤に舞ふ子らに憩ひて

あれが恋朱欒を分けてくれし人

愛てふ魔物に憑りつかれたる

しらぬ間にエイズのパンフ配られて

ダイヤルインに電話切換

許せない増消費税歪む月

卒塔婆で焼きし芋勧められ

屋根を打つどんぐりいつもドレミのド

妙高望み一茶尋ぬる

折り入って物を頼まれ湯中りし

蚕を貰ふバス停の椅子

花枝垂奔放に花咲き競ひ

うつらうつらと春昼の夢

平成五年十一月七日 首尾

於 深川芭蕉記念館

哉 清 光 町 代 光 町 哉 光 哉 町 哉 町 光 清 代 町 哉

木の実落つ

須田 智恵 捌

階に木の実落つるや登窯

初雁渡る遠き山脈

クレヨンの黄色で描くは月ならん

バターロールにジャムをたつぷり

涼やかにからくり時計鳴りはじめ

麻服めだつ街の雑踏

還俗てふ噂の友とすれ違ひ

酒たしなめばくどきなめらか

秘めおきし手帖に記す恋の数

自動ドアふめど開かぬ

ゼネコンは鹿島清水に間組

烏兔匆々の五十年たり

月仰ぐ風にそよげる枯芒

癩癩持ちが啜る諸粥

エンジンを全開にして牌を打つ

まちがひ電話ハイすみません

あけぼのの花の気配に夢さめて

梢にかかれる糸切れし風

須田 智恵
長崎 和代
雑賀 遊
篠原 達子
神谷 安子
副島 久美子

遊 久 和 同 久 遊 安 達 遊 久 達 和

磯菜摘籠みせ合ひつ賑やかに

校長先生声かけてゆく

クロスボウジョギングの背を貫ける

ペットやたらに捨てるべからず

ここだけの話に氷菓とけはじめ

落葉松若葉偲ぶ遠き日

故郷を持たぬデラシネ旅続け

人目かまはず固き抱擁

奔放に女盛りの狂ひ咲き

古びし壁に「印象派」の絵

邯鄲の通奏低音織き月

兄のお伴で毬藻祭に

爽やかにマウンテンバイク坂上る

文庫本読む耳栓をして

おてだまとじゃんけんぽんとおはじきと

観天望氣お得意の技

篝火の万朶の花を浮きたたせ

何と間の良き鯛の浜焼

平成五年十月二十七日 首尾

於 源心庵

安智遊安遊久和久達和安遊安達久安同達

小判草

副島久美子 捌

風吹いて音の生まるる小判草

とうすみ蜻蛉庭石のへり

夏山の写真現像こもりゐて

くもりし眼鏡服でぬぐひぬ

ビルラッシュ四角の空に月まどか

スクランブルを急ぐ夜学子

御命講太鼓のひびく方へ行き

握られし手を握りかへせる

恋人の鞍替へ早き課長さん

ぐつと伸びしてあくび虎猫

スカッシュのラケット載せる自転車に

どれが効くのか迷ふドリンク

もの言へば月も凍てたり自民党

頬かぶりの泥棒の影

コイン入れクレーンゲーム大当り

六区のオペラ昔なつかし

清搔に花散りかかる緋毛氈

甘辛だんごのどかなる午後

副島久美子
下坂元子
梅田利子
篠原達子
小林千雪

雪元同達久同利元達利同元利雪

遙^すかよりかげろふ長き貨車眺む

蹠^{ふみ}ぬらして浜の砂踏み

島民をいたはり見舞ふ兩陛下

ホテルの窓を閉ざすカーテン

フィンランド白夜ダートに興じつつ

すれ違ひざま肩が触れ合ふ

指ごとに金銀宝石伊達男

回転ベッド鏡巡らし

あの世でも続きを書いて森瑤子

葡萄酒の盃ひとり挙げたる

まご唄の遠のいてゆく鯛雲

ひょっこり出でし垢^{あか}舐^なの月

文化祭とんと解らぬ抽象画^{ナウ}

鳩に餌をやる贅道

「はい」と言ふ孫の返事の愛らしく

世になじみきし土日連休

垣越えて花の一枝咲き初めし

夢に遊びぬ曲水の宴

平成五年七月二十八日 首尾
於 源心庵

雪 久 達 雪 元 雪 達 利 元 雪 同 利 同 達 同 利 元 雪

蝸や

高瀬 美保 捌

蝸や一本の道白く見ゆ

夕月淡くかかる山の端

ホップ摘むバイトも今日で終るらむ

留学資金ちよっとたりない

むく犬が舌なめづりし卓の下

着ぶくれの子の背に糸屑

年ッの市団十郎に似たる声

俺の言葉を信じればいい

ペリエでもお代りすれば酔ひますよ

ファミリーカーの運転は誰

桧席も旅も四人が割安で

蠅が後足もんでゐるなり

夏安居の写経終れば月中天

あっけらかんと唄ふカラオケ

宰相は昔殿様スポーツマン

もやひ綱とく舟のゆらゆら

あといくつ花の名木見尽して

わさびきかせた握り寿し喰ふ

高瀬 美保
式田 和子
内田 麻子
松田 多恵子
中川 哲
松田 義夫

哲多 和夫 麻和 夫哲 麻多 和夫 麻多 和夫

ナホ
嘯のひときは増して峠越え

露天風呂には水着着用

タレントに取材カメラが殺到し

UFOも見た人魂も見た

変声期ママがいつしかおふくろに

年の差なんか平気へいちゃら

この手でもいいかと開く秘画の帙

湯たんぽ代り猫とをんなと

奥尻の津波に家財さらはれて

コンビニストア目立つ空棚

モスクワの纖月の街佇みぬ

暁星祭のうれし復活

ナウ
どびろくに酔へる戦友生き残り

もったいないが口ぐせの爺

キューピーの掌ぱっと開かれて

朝寝の夢の余韻楽しむ

新入学新社会人花の風

乗込鮎ににぐる小流れ

平成五年八月二十一日 首尾

於 房連庵

多 同 哲 和 保 多 哲 夫 同 和 麻 多 和 保 夫 同 多 保 麻

秋燕

瀧川 雅代 捌

舟繫ぐ一枚岩や秋燕

ひたひた上る瀬戸の初潮

ふくめ煮の栗むく指に月差して

みやげ話に笑ひこぼれる

輸入屋の店主も着たりアロハシャツ

汗を拭きつつ急ぐ球場

観音の金色寂びし藤井寺

柱にかくれ人を待つ影

草原の豹にも似たる貴方なの

高まり流るジブシーの唄

学究の読み解く文字楔形

這ひ這ひの嬰つまむ糸屑

月高く蒟蒻すだれ踊ること

案山子揚げする安曇野の里

駅長の白手袋に指呼進行

禁煙ポスターやたら貼りつけ

華道展正面飾る花の枝

春の炉に点つ抹茶匂やか

瀧川 雅代
下坂 元子
山崎 一恵
梅田 利子
八角 澄子

利子 澄恵 同元 同元 澄元 利元 恵元 利元

町角で帽子押さへつ蒙古風

射程ののびる北のミサイル

はしゃぎ過ぎ葉飲んでは鬱となり

寿限無寿限無でめざす真打

おじぎ草深ねむりする宵の口

ガレのランプの朱けの灯れる

マフをとる間ももどかしく縋りつき

横抱きにして奪ふ姫君

馬銜^{はみ}嚙ませ荒馬みごと乗りこなし

岬にさつと雨の過ぎゆく

測候所仰ぐ月かけ清らかに

黙し聞きをり虫のすだきを

こきりこに合はす手拍子あら走り

二尺鉢焼く古稀の陶工

デパートは知恵をしぼって客集め

蝶の標本見せ合ってる

たたなはる山また山の花の雲

名残の霜を踏んでポストへ

平成五年九月二十三日 首尾

於 山崎邸

同利同 澄同 澄恵 元恵 利恵 同澄 元恵 同澄 元恵 利恵 同澄 代恵

花に逢ふ

ひとすじの道辿りきて花に逢ふ

研しきりに近き鶯

焼栄螺沸りし香立つならん

和菓子うす紙畳み重ねて

目を凝らし漆塗る刷毛照らす月

いとどの潜む水甕の陰

鮮かに割りし西瓜に大喝采^ッ

コンカジルック彼とお揃ひ

通勤の車内堂々紅を引く

修繕済みし弁天の洞

耳なしの芳一の本お土産に

お安くお世話不法入国

億万の富を蓄へ冬の獄

狐狸の月に集る

銘柄は問はず長鯨川を干し

シャーレの中に増やすウィルス

デイゴ炎ゆ学園の角曲るとき

日焼け少年くんずほぐれつ

橘 文子 捌

橘 文子

富山 泰子

橋野 代々子

畑山 レイ

代 泰

同 代

イ 同

イ 泰

イ 泰

同 泰

同 泰

同 泰

同 泰

同 泰

同 泰

同 泰

同 泰

同 泰

出羽守あだ名されたる世界通^{ナオ}

能狂言にあくび居眠り

懷に油断召さるな愉快犯

マイク恐れぬ魚屋の婆

時到る待ってましたとお兄ちゃん

つっぱりの冴えみせる場外

宝恵駕の威勢よろしき左棲

だめと言ひつつ緩めてる胸

流させて足の先迄洗はせて

今じゃ中風でよいよいの日々

満月の鎮もれる森黒々と

ドラキュラ目覚むうそ寒の頃

おどし銃鉛の弾を連発し^{ナウ}

廃品回収姿消したり

幸不幸夢の如しと同窓会

何処ともなく聞ゆコーラス

墨堤はライトアップの花大樹

旅も終りか朧なる影

平成五年四月十六日 首尾

於 鎌倉おうめ様

志代 志代 文伊 文伊 志伊 志伊 文伊 文伊 志伊 志伊 文伊 文伊 志伊 志伊 文伊 文伊 志伊 志伊

秋草の

秋草の影を濃く置き野の佛

名月渡る小流れの面

オードブルいくらからすみ飾りゐて

好きなポップスCDで聴く

強力をなりはひととして山の宿

麻の暖簾の模様だんだら

古都めぐり地図をたよりにレンタカー

親衛隊のどつと押し寄せ

上役と煙も立てず深い仲

判透明のごみ袋いや

ガン告知賛否両論定まらぬ

クルスを胸に神父優しき

鴿の眠る姿に月の差し

樹氷の写真こもる暗室

又一つ増やしてパイプコレクション

幕末以来続く輸入屋

甦る薄墨桜飛花しきり

盃を重ねて過すのどらか

長崎和代捌

長崎和代

瀧川雅代

山崎一恵

副島久美子

梅田利子

代子

久利

久利

恵利

代利

利恵

利恵

利久

利久

久利

久利

恵久

恵久

若^{オホ}鮎ののぼるが如く大関に

テレビキャスターいつも忙しく

モロッコのクスクス料理覚えて

象形文字を刻む洞窟

少年のゆび指してゐる早星

原爆の忌の思ひ新たに

久しぶり妻と抱き合ふエアポート

柱の陰に間夫のやきもち

あれまあま出では引つ込む玉介さん

はつかねずみのまはす輪ぐるま

子の無きも有るも哀しき十三夜

運動会に招く町長

赤^{アカ}い羽根声を張り上げ呼び止めて

眼鏡のつるがずれて慌てる

この階でエスカレーター行きどまり

電子操作の夢のマンション

丘の辺に憩へば遠く花の雲

風船売りの荷を下ろす昼

平成五年九月二十六日 首尾
於 源心庵

代 恵 利 代 久 代 久 代 久 代 恵 利 代 利 同 久 同 代 恵 和 恵

湖見ゆる

中島 啓世 捌

湖見ゆる峠の茶屋の夕月夜

うらの畑の熟れしとうきび

黄落の東欧の街ゆき行きて

指笛吹けば小犬駆け来る

かんばちの鮎だね並ぶ漆膳

しばしまどろむ古き籐椅子

なつかしきジャズ聞え来る芝の庭

ダンスの相手今はひと妻

連れてつてこの世の果のはるかまで

中学生の頭丸刈り

托鉢の僧は草履に雨しとど

木曽路はすべて山の中なる

故郷は訪ふひともなく寒の月

ベイブリッジに百合鷗舞ふ

進水式シャンペンシャワー虹となり

巻き毛の少女いだく人形

花の昼朱の角樽を床の間に

春の野をゆく雲は夢見て

橋本満喜
橋本六三
藤井弘美
牧岡歌子
山本八乃子
井上哲也

喜也 三美 八也 三美 歌美 歌八 美

旅半ばハイジの里は種をまく^{ナホ}

減税論議不足財源

青野菜厨あづかる主婦の顔

橋の高さよ早き流れよ

大夏野オビ・エニセイの蛇行して

魔女跳梁す野外演奏

肢長き姿眼にやきつきぬ

三日居つづけ不精髭撫で

しゃりこうべおもちゃにしてる島の子等

鐘が鳴るなるみんなちりぢり

名月の庭にシャベルの置き忘れ

秋のコンペは賞品やま盛

綱取りをやぐら太鼓が打ちいだし^{ナウ}

断食あけに群れるわかうど

この街にモスク八百青き灯が

田圃のつづくその先の富士

久方の遠き友より花便り

古城の隅に春蟬をきく

平成五年九月十七日 首尾

於 藤沢橋本家

喜 三 八 也 同 美 三 喜 美 歌 八 喜 三 也 美 八 歌 也

秋出水

曾祖父の使ひし木樋秋出水

橋ひたひたに真夜中の月

初入選袖餅子もそへて知らすらむ

CMソング歌ふ幼なら

尾を立てる猫の気持が良くわかり

庭の片隅残る簞目

紙漉^ッの里に住みつくエトランゼ

くちづけすれば匂ふ生姜湯

人前で抱き合ふ男女憚らず

張り扇おちさん「はい出番です」

額かぬ補償侵略認めつつ

本日休診竿は選ばず

月蒼し洗ひ髪梳く縁の先

岐阜提灯のゆらり点りぬ

江戸ことばぽんと落して木場の衆

三ヶ国語で案内するツアー

神官のまなこ盗みて花手折る

蝶追ひかけて蛇の飛び立つ

中田あかり 捌

中田あかり

市之沢弘子

吉村恵美子

岩井啓子

小林千雪

権頭和弥

啓

弘

千

啓

恵

和

恵

弘

和

啓

和

弘

笑^{オホ}ふ山キャンバス立てて酒を酌み
使ひなれたる左ハンドル

恐竜の骨が出でしと聞きつけて
社長たるものはめはづし過ぎ

帆船の対島海峡雪しまき

ボタンを押せば届くミサイル

古手屋の埃はらって売るランプ

一つ目小僧棚にほの見え

ひんやりと乳房まさぐる気配して

集団結婚いまだ崩れず

束縛を神も許すか月中天

かかしの着たるスカートはミニ

シャ^{オウ}ンピニオン森のディナーの整ひぬ

来し方まざと脳裏かすめり

雑巾を亀甲に刺す納戸婆

ゴルフバックをハワイ土産に

花便り明朝体のワープロで

野外劇場陽炎の中

平成五年八月二十七日 首尾
於 江戸東京博物館

啓 恵 啓 恵 和 千 恵 和 弘 千 同 啓 弘 和 同 恵 あ 恵

阿蘭陀渡る

馬に鞍阿蘭陀渡る出島かな

柳絮漂ふ堀の石橋

母子餅色ほのぼのと盛りつけて

オセロゲームの兄と弟

山脈の走れる果の三日の月

おしいつくつく鳴きしまひたる

ハロウィーン魔女と骸骨腕を組み

キスの唇ゑくぼ渦巻く

はがらかに嬰ができたと電話きて

帰港間近き遠洋の漁

風見鶏明治の館高台に

付け句案じて汗だくの月

心太するりとのどを素通りし

警邏巡査のめぐる雑踏

呆けぬやうおびんづるさま撫づる人

雨もやさしき谷あひの里

花の軒使はれぬ機隅にあり

筵敷き延べ干せるいかなご

八角澄子捌

桑篠瀧下八角
原原川坂澄
美達雅元澄
津子代子

元同代津元津達元代達代元達津

春^ナの土おかつぱスキップドレミファソ

モダンアートの翳がおどるよ

直木賞発表を待つ喫茶店

司法試験で齡六十

氷壁に打つハーケンの丁々と

白きセーターお揃ひの柄

掌にあふれる乳房もてあまし

口説いてみても逃げるおめあて

横町の何処かにあつたトリスバー

誰もが惜しむ名優は逝き

月今宵崎宮皓としづもりぬ

秋繭^まの値によるこびの家

さしかけの将棋かたへに走り蕎麦

電車の音もまじる街騒

クラス会二泊の旅の案内状

スナップ写真焼増しをして

横綱の雲龍型に花吹雪

泉州平野揚ひばり鳴く

平成五年三月十七日 首尾

於 池袋滝沢

達 津 達 元 達 津 同 津 達 代 澄 代 達 元 達 津 代 達 元 澄 津

曼陀羅図

原田 千町 捌

曼陀羅図水仙の香をまとひけり

障子斜めによぎる鳥影

ラケットを小脇にかかへ足早に

人形時計仰ぐ稚な等

たたなはる遠山の上朧月

鮎放ちをり長靴を履き

花衣年代もののワイン酌む

女神の馳けしあとの若草

掌を添へて胎動教へ身じろがず

あの娘変はった名前まで変へ

ビアフラでオートミールを炊きをり

北方領土の答弁に立つ

中天に月あり気象観測所

ギターの絃を締めるやや寒

源氏読む冬の用意もそこそこに

突然に来る微震激震

緑台の将棋でかけし王手飛車

年に似合はぬ汗疹びっしり

原田 千町
副島 久美子
中田 あかり
大窪 瑞枝
福井 隆秀

子同 秀子 枝子 子り 同枝 子り 秀子 枝子 子り 子同 子

ナ

ガリバーは侏儒の国でくすぐられ

声張りあげて刻を告げたる

勘定の合ひて銀行御名算

暮ともなれば続く葬式

しずり雪犬の嗅ぎゐる旅靴

ラブロマンスもスリラーも書く

過去のある女に未来捨て去りぬ

閨の蛩の息づくがごと

船弁慶ひとふし謡ふ十三夜

ぬかご飯とはこれは風流

赤い羽根募金目標達成し

電子辞典の広辞苑出る

ナ

嬰鑠と美髭たくはへ傘寿すぎ

ジョギングの群れ避ける堀端

仮ビザで工夫にまじるイラン人

郷の便りに乗せて貝寄風

転生のかすかな記憶この花に

見守る納屋にねむるお蚕

平成五年二月三日 首尾

於 俳句文学館

り 町 枝 子 同 り 子 り 町 枝 り 枝 秀 枝 同 秀 子 り

啓蟄や

東
郁子
捌

啓蟄や芭蕉稲荷の注連の揺れ

春の潮に水脈を曳く船

プレリユード弟子の譜めぐりうららかに

ワッフル焼いて淹れる珈琲

山頂を眺めてゐれば月のぼり

犬かけめぐる細き糶田

後の雛母系家族の顔並び

それぞれ胸に抱く面影

退社時のデートの電話混線し

円高円安一喜一憂

何もかも忘れて酔って千鳥足

石を置いたる京の街筋

aの字を描きほうたる飛んでゆき

浴衣で仰ぐ病院の月

鈍彫りの地藏菩薩の写真掛け

もの売りの声遠く聞ゆる

大使館前の大樹の花盛り

チェスを囲みてあたたかな午後

東 武 原 浅 山 杉
井 田 賀 田 内
郁 智 千 淑 和 徒
子 子 町 代 久 司

子 子 町 代 久 同 町 智 久 町 智 代 智 町 智 代 町 代 町 代

こ自慢の菜飯・青鰻馳走され

あの手この手で就職のつて

翳りたる景気はいまだ浮揚せず

羽をひろげて孔雀くる夢

サルトルと同棲をして妻ならず

もつれもつれて出口なき恋

歌舞伎町迷宮入りの小晦日

角巻風のシヨール買ひたり

ふるさとは遠しと唄ふ人のゐて

轆轤六年廻す陶工

月青く皎々と射す海鼠壁

提督ゆかり柚子かほる寺

ゆく秋の殆んど戦後生まれなる

昭和の残る坂の路地住み

太棹をびんと響かせ一の糸

うーんと伸びする雄の三毛猫

花びらの舞ひ込みてゐし旅袍

初虹の橋くぐりゆく子ら

平成五年三月七日 首尾

於 深川芭蕉記念館

智久司町同町同司久智

春立ちぬ

地下街に麴麴の香流れ春立ちぬ

壺のミモザの黄に映ゆる窓

潮干狩向ふ三軒声かけて

単線駅長いとも忙しく

有明のふと仰がるる西の方

粧ひ初めしをちこちの山

美術展土蔵造りのギャラリーで

細卷き煙草織き指先

そりあとの清しき彼にかしづかれ

家庭医学書ずらり本棚

元氣です具合悪いは財布だけ

旅の鞆は股で押へる

ドナウ河聳ゆる古城月も炎ゆ

右に左に蝙蝠の影

書記長はしどろもどろに弁明し

同時通訳機械まかせで

花浴びて白尉はいま橋がかり

斑の仔猫を膝に抱き上げ

百武冬乃 捌

山 梅 篠 瀧 百
崎 田 原 川 武
一 利 達 雅 冬
恵 子 子 代 乃

代達代利達代利達利代利惠達惠子子代乃

二月尽

福井 隆秀 捌

眼福の版画法楽二月尽

君子蘭など咲かず玄閑

厩出しの駒の前搔きせはしげに

せつかれながらエンジンをかけ

待宵に小さくハミング口ずさみ

運動会のおむすびの出来

千松チマツの役を貰ひし秋狂言

柱時計が刻を告げたり

ファスナーがひっかかったの更衣室

すきやねんなどおくめんもなく

神田川面影橋の風の中

暑氣払ひとて飲めば弦月

夏安居の新発意案ず婆のゐて

皺の数ほど溜まらない金

自由市場行列長き雪の上

おんぶにだっこ世話がやけるよ

花の句座どこがつくやらつかぬやら

同じところに蜂の巣づくり

福井 隆秀
内田 麻子
式田 和子
松田 多恵子
高瀬 美保
松田 義夫

和保 夫 恵 保 麻 和 恵 和 夫 和 夫 和 麻

細き脛かじり卒業親離れ

伽をはづれてこんな不自由

背後霊水晶玉に浮きだして

にやりと笑ふダリの肖像

家に居る夫のことを底鯨

冬眠中です起さないでね

ご機嫌にお任せしますこふの鳥

シャネルの香りいつかなじみし

恍惚のをんないつしか「増」となり

もの色しろく染めし黄昏

月世界子供と未来夢に見る

墓参兼ねたる熟年の旅

松ぼくりあそばせてゐる掌のなかに

副大統領とても暇です

証券マン電話かけるもためらひて

バイキングには胃薬を持つ

ときじくの雨至りけり花筏

遠き山々小綬鶏の鳴く

平成五年二月二十八日 首尾
於 高瀬宅

保 秀 恵 麻 夫 保 夫 恵 夫 和 保 秀 和 麻 保 和 麻 恵

秋の蛙

独吟
佛淵
健悟

朝風や秋の蛙の透きとほる

月やや寒く残る裏山

小座敷に通草飾りて遊ぶらん

ひいきの和菓子甘み抑へて

ジョギングの服装ばかりほめらるる

積み上げてある白菜のつや

くしゃみをし真夜をさめれば虎落笛

三日をかけて終はる引越し

定位置の銃動いたと仕置きされ

アパルトヘイト様々な過去

ゆうゆうと外国船の停泊し

薩摩郷土にまはる廻状

しめやかに月にも見せぬ葉喰

気まぐれ病の憎らしきこと

きざはしのプリマドンナの匂ひ立つ

今度の馬は血統で買ふ

とっときの茶に入れかへて軒の花

紙飛行機は春泥に落ち

予^オ備校生寄りあつてゐるのどかさよ

除幕式には喇叭吹出る

雲海のかなたに沈む大湾

着火のわるきライターを振り

真横にて背筋を伸ばす老刑事

爪かむ癖が抜けぬ令嬢

美は醜で醜は美とかや愛の家

彌撒の時間が書いてあるメモ

郭公の声をねえやと数へゐて

乞ふ御期待と手品師のまね

名月に組閣人事をあれこれと

魚拓を褒めて芋を送られ

唄^{オウ}好きのそばに寄りくるちちろ虫

ミン商ひ国中を縫ふ

かけ替へし大吊橋のたのもしく

石投げの距離競ふ兄弟

なぞなぞに倦みて伏しゐる花の下

朧おぼろになりていく峰

平成五年十月十三日 起首

平成五年十一月二十六日 満尾

於「宿六」

紅葉かな

水鳥ますみ 捌

峽を行く貨車になだるる紅葉かな

しばし留めん秋の駒の背

母と娘の月の厨辺向きあひて

リリと鳴り出すコードレスフォン

事典・辞書・季寄せ・歳時記・新刊書

外套の衿たてて挨拶

雪しまくペテルスブルグで再会す

籍だけの夫名ばかりの妻

飄々と荷風散人多情なり

ふろしき包みの中は通帳

名物の「鬼ごろし」さげ友を訪ひ

啖呵を切って脱ぎし諸肌

半夏生ゆっくり現れし月の弦

連立内閣賛否ともども

皇室のボンボニエールちらと見せ

筆太に書く夢の一字

山寺の鐘の誘ふか花吹雪

蚕を箱に分校の児ら

水鳥ますみ
秋元正江
真田光子
村田富美
倉本路子

江光 江路 同美 江み 光路 同江 江光

足で漕ぐスワンの小舟春の湖

車椅子から写すファミリイ

会社員時差出勤をすすめられ

猫べんとうをつくる毎日

イカロスの強がりと言ふ獄中句

冷たき視線甘える彼

金沢の東廓の路地に泣き

緑台将棋野次に邪魔され

精いっぱい生きてころりと死にたしと

ふと気がつけば世代交替

月天心牧場の柵のきはやかに

ボタニカルアートの茸いろいろ

やや寒の膝をかかへて聴きしジャズ

地上三階地下鉄に乗る

合鍵はどんな種類もすぐに出来

彩も寂びたる享保の雛

ささやかに花守囲む集ひなり

鯁を焼いて遊ぶふるさと

平成五年十一月四日 首尾
於 深川芭蕉記念館

路江光江 路美江 路美江 路美江 路美江 路美江 路美江 路美江 路美江 路美江

竜の玉

村田 富美 捌

天の色あつめて濃しや竜の玉

腰掛待合炉開の席

毛糸編むウオークマンを確かめて

ひときは高く母の呼ぶ声

月の下四輪駆動停まりたる

文庫本買ふ漸寒の町

江^{うめのうま}鮭煮つめて今津つくだにや

幼馴染みにばったりと逢ふ

そのかみのクレオパトラはお多福に

神殿の奥ひそみゐる猫

気がつけば旅の鞆の重くなり

ロードマップに記すメーカー

ナイターの満塁ホームー照らす月

冷酒右手につまみ左手

気安さは単身赴任唄もでて

海が見えくる螺旋階段

城跡のさくら並木の花の影

子とろ子とろに蝶のまつはる

村田 富美
秋元 正江
水鳥 ますみ
真田 光子
倉本 路子

光 江 路 光 江 光 江 同 江 同 光 同 江 同 同

つばくろや

つばくろや店先に積む新刊書

ぴょんぴょんとゆく入学の児ら

遠くより茶摘の唄の節よくて

なた豆煙管縁にころがる

湖に舟漕ぎ出し月の宴

はや一斗樽今年酒空け

馬肥ゆる柵に牧夫の輪を作り

生放送の美人キャスター

カメラマン怪しい噂かくれ蓑

季節はづれの低気圧来る

真白に樹氷の木々の並びゐて

どうにもならぬ政治家の金

心太つき出す婆を照らす月

会釈して過ぐ峰入の僧

ボンベイに沈黙の塔黒黒と

はじめて髭を立ててみてみる

吉野大夫おいらん道中花吹雪

此の世界なし陽炎のなか

八代

嬬捌

八代桑原美津
長崎和一
山崎一恵
内田麻子
豊田好敏
佐藤良

嬬津代麻恵麻弥敏津敏弥津弥

あの鳴くは夕蛙ナオまた土蛙

ピエロに付けしほくろ大きく

泰西の名画に列のオバタリアン

株で損して土地で損して

けふも焼く潤目鰯の香ばしく

声かけられしぼろ市の隅

首細き男いぢめてみたくなり

溺れる性と大麻コカイン

密室の愛の終はりのシャワー音

猫は横座でおお欠伸する

月中天荷を押し帰る生薬屋

鬼の出そうな紅葉橋行く

運動会ウツ二人三脚親と子と

ステーキハウス五日制なり

理髪師の缺さばきのかろやかに

下町育ちべらんめえなる

城跡の心字の池に花枝垂れ

海苔たっぷりのおにぎりの籠

平成五年三月二十七日 首尾

於 朝日カルチャー教室

敏 麻 敏 恵 弥 代 麻 恵 津 敏 代 津 恵 麻 代 弥 恵 敏 麻 敏

轉や

山口みづゑ 捌

囁や陶榻二つ陽にぬくみ

十字ひと枝手折る庭先

家中で掃き立ての蚕座囲むらん

携帶ラジオつけっぱなしに

放物線良夜の浜に小石投げ

露置く船の纜を解く

新蕎麦のふとさまちまち汁辛く

ととらく気質根づく土地柄

プロポーズ待ってましたとゴールイン

教祖に届くお包みの山

護摩太鼓五臓六腑にとどろきぬ

鯰ではかる地震の強弱

兜の子菖蒲刀で月を斬る

ずるい小父さん集ふ議事堂

町に行くパン屋豆腐屋街宣車

ペットショップのテリアよく売れ

花の昼かしこみ受くる御進講

みそひと文字に因む野遊び

山口みづゑ
米谷貞子
大窪瑞枝
市野沢弘子
坂本孝子
雑賀遊孝

孝貞弘同孝同枝貞孝弘遊孝遊

機おとの

機おとの聞こゆる庭や芭蕉林

新小豆干すさむしろの上

月よりも流星のこと思ひゐて

学習ノート二冊目に入る

かぶと虫じゃんけんぽんで分ける子ら

岩の間をぬらす滴り

大和路をボンネットバス満員で

吉祥天女わが恋仏

傷ついて初めて知った彼の胸

燃えないごみの積まれゐる隅

マラソンの最終ランナー通りすぎ

自己主張する仕事人間

寒卵ごとりと月を仰ぎつつ

足袋はしてある背戸の竹垣

屈託もなき若者ら屯して

くり返し吹く豎笛の曲

湖めぐり舳先に立てば花の雲

もろこ釣る影あちらこちらに

山崎 一恵 捌

山崎 一恵
秋元 正江
梅田 利子
瀧川 雅代
百武 冬乃
上月 淳子

乃江 同乃江 乃江 代利乃 淳代 淳代 乃代 乃

清明^{ナホ}の書棚に並ぶ俳諧史

焼きしめ強き備前火襷

この頃は脳の具合がおかしくて

行革だけは是が非でもやる

クラーはきき過ぎるほど効いてをり

さらし鯨で鬼太郎と酌む

夢うつつあやしき美女のひざ枕

キスする度に札に羽根はえ

板橋の凸版印刷うらの坂

半世紀前赤で捕まる

お預けがひとつ覚えの犬と老い

だらだら祭月細りゆく

コロラチュラソプラノ唄ひ深む秋^{ナウ}

籠の鶉の水を取り換へ

格安の航空券で友と巴里

似顔絵描きの言葉すくなく

濃きうすき枝垂れの花をくぐり抜け

Uターンして励む畦塗

平成五年八月二十五日 首尾

於 源心庵

江 淳 乃 利 同 代 江 淳 乃 代 乃 惠 利

◇
源
心
◇

冬紅葉

東
明雅
捌

潮入の池の波紋や冬紅葉

四温日和に集ふ連衆

クリームを角の立つまで泡立てて

画集の届く午后の宅配

半月の兎は何処と子の問へる

踊終つて辿る野の路

新走り酔ひし脳裡に人の顔

教へてくれぬ電話番号

蚤の市アンチックジュエリーじゃらじやらと

サンピエトロは鳩の遊び場

日雇の男に夜は明け易く

六神丸のほろ苦き味

踏みこみの畳のへりに花散りて

庵主ひっそりかげろふの中

坂本孝子	桑原美津	雑賀遊	長崎和代	久保田庸子	東明雅	孝雅	庸孝	津遊	孝遊	代遊	遊	庸
------	------	-----	------	-------	-----	----	----	----	----	----	---	---

ナオ
くり返しテープで習ふ茶摘歌

研修旅行サロンバスにて

雪しまく妙義山容黒々と

蒟蒻農家かさむ借財

賂は支店長より本店へ

ちよっとお尻を触る上役

羅に抱く命のあえかにて

門を閉ざして籠る世阿弥忌

日本海月に漂ふ漁り舟

稲架の形の変る峽ごと

ナウ
やうやくにメビウスの輪を抜け出して

デル・デス・デム・デン覚えうららか

花盛り空より笑ふ鬼瓦

風船売りの道に一服

平成五年十一月二十四日 首尾

於 源心庵

代 雅 庸 遊 津 孝 代 遊 庸 遊 孝 津 孝 代

旅立ち

掛大根旅立ちの川渡るなり

初冠雪のしるき連山

あたらしき連句形式学ぶらん

急須の煎茶しぼりきつたる

一族はみな丸顔の居待月^ッ

澄みわたりゆくサキソフォン・ソロ

魅惑する聖母生誕祭の女

愛の裏切りいつも許して

犬小屋の屋根に乗るのが好きな犬

虹がダブルでかかる半島

羅針盤マドロスパイプよこ銜へ

珍陀の酒の卓を夢みぬ

たけなはの税制論議花の下

ペースメーカーつけて鳴く亀

秋元 正江 捌

秋元正江

大窪瑞枝

瀧川雅代

神谷安子

百武冬乃

枝乃

江代

乃代

代乃

枝代

安枝

安枝

枝安

安枝

彌生^{ナオ}尽堅穴住居調査団

珙瑯^{コウロウ}食器煮^ヌ盛り上げ

秀才と云はれたむかし思ひ出す

木守り柿の枝にぼつんと

カーディガン彩もあざやかスオミ^{スミ}の娘

油断めさるな恋は強奪

登頂の月にあいつの綱握り

溪に落ちゆく岩鷄^{イソ}ゐて

頬髯に白髪混じりし住持さま

碁敵と云ふ幼な友達

小学生^{ナウ}近道をする塀の穴

めばるの並ぶかどの魚や

花枝垂れヘルン怪談読みつづく

窓を開ければ清明の雨

フィンランド

平成五年十一月二十四日 首尾

於 源心庵

代 乃 安 代 乃 枝 枝 乃 代 乃 江 枝

木 枯 へ

木 枯へ真向ふ旅の始めかな

初鶴渡る沼の小波

子等寄りてトランプ遊び賑やかに

スポンジケーキ皿に盛りつけ

月^ッ差せる「洗心」の軸くつきりと

吾亦紅にもひそやかな紅

額覆ふ布純白に十字架祭

恋の懺悔を語るやや寒

どさ回り女形半生本にして

ペットの栗鼠のしっぽふさふさ

ひと息に麦酒飲み干すのどぼとけ

残高零になりし借金

花の奥薹の鯨の見えかくれ

並べて干せる春泥の靴

市 野 沢 弘 子 捌

市野沢 弘子

下坂 元子

上月 淳子

篠原 達子

八角 澄子

淳子

元澄

達澄

元達

淳元

同元

淳同

淳同

淳同

ナオ
メーデー歌よぎ公園出発す

野坂参三百歳で逝く

錯落し古自転車を組み立てて

中から締める寝袋の口

厄払うちのかみさん追っばらひ

気障なジゴロのはでなネクタイ

夕立のヨットハーバー帆をおろし

宇宙さぐりてでで虫の月

夢の中げげの鬼太郎とらまへる

ゲームボーイの電池取り替へ

ナウ
人生の残り日夫と数へつつ

注いでもらひし玉露まるやか

振り仰ぐ峰から峰の花万朶

田圃の縁にたにし鳴きをり

平成五年十一月二十四日 首尾

於 源心庵

澄 弘 澄 同 達 淳 達 同 元 澄 淳 達 淳 澄

二の酉の

二の酉の底抜け晴れや時つ風

紅葉散り初む庭の敷石

子どもらは絵具の彩を選びゐて

甘味少なきケーキ大好き

ホップ摘むバイトも終り月細し

帰る燕にしるき戸隠山

秋祭おかめひょっとこ賑やかに

太めの女僕このみで

三男が先づいちばんに嫁をとり

半農半漁住みつきし島

反対のプラカード立つ核発電

もめにもめたる今期国会

階を昇れば花の振りかかる

蛤買うて夕映えの雲

下鉢 清子 捌

下鉢 清子

副島 久美子

東 郁子

山崎 一恵

内田 麻子

須田 智恵

郁

久

麻

久

一

智

同

麻

友^{ナオ}を招び春興の酒酌み交す

木彫の鈴を飾る床の間

へそくりが不意に出て来て来てショッピング

温泉^{いづゆ}の旅の夢の拡がる

難病もびたりと治す呪師

蜥蜴守宮の這ひまわる月

バルコンの下でヴァイオリンセレナーデ

薄きシヨールの中の抱擁

砂ぼこり駅馬車荒野走りゆく

望郷深き元日本兵

老^{ナウ}い母は念仏を誦し健やかに

いろとりどりに浮ぶ連風

咲き満ちし花のグランドジリーグ

踏青の靴心ゆくまで

平成五年十一月二十四日 首尾
於 源心庵

智 清 郁 智 久 同 一 麻 郁 一 郁 久 麻 郁

◇二十韻◇

桜桃忌

わが身こそ何より愛し桜桃忌

目深にかぶる夏のピケ帽

調律師皮の鞆のふくらみて

子どもらを呼ぶ声のもれくる

とろ^ッとろと燃ゆる狐火月淡し

鬢付油つんとくるなり

くちづけのあとのむなしさ手鏡に

「写るんです」でちょっと一枚

アundesのマチュピチュ遺蹟風渡る

幸せの虫沈むテキーラ

東
明雅
捌

鈴木千恵子

奥野美友紀

秋元正江

貴船貞博

東明雅

江

博

子

同

紀

ナオ

山楂子の菓子を初めて食べた夜

駐在さんと少年の月

連絡船去りたる湾をのぞむ町

白いハンカチ恋の形見か

舞姫と切れて鷗外総監に

明治生まれも頓に減りたり

ナウ

円高に縁なき暮らし五十年

越して来た家鸞が飛びこむ

名園の池ひろびろと花筏

陽炎のたつ土手のランナー

平成五年六月十三日 首尾
於 光ヶ丘近隣センター

同 子 雅 紀

同 江 同 博 雅 博

秋草を

秋草を活けて翁に捧げけり

川冷やかに閑もれる席

月の出の連続写真撮るならん

キリンの餌の桶をぶらさげ

しょうゆ顔すたれ気味なりみる鏡

生放送で求婚・「YES」と

迷ひたる眞間の手古奈は井戸の中

沙漠の果てに何を夢みて

ランチ寿司いか・たこ薄く切りて出す

白絣着て香具師の二代目

秋元 和彦 捌

秋元 和彦

中田 あかり

吉村 恵美子

丹下 博之

り

子

り

之

子

り

独房ナオの小さき窓より薄日さし

紙上俳壇駄作秀作

ドンファンは口説くより先手が早く

閨遠のきて身に疼く風

銅葺の屋根に忘れし羽子の月

神の酒甕うづたかく積み

愛用ナウの老眼鏡に万歩計

ボートレースに児等の喚声

アパート中花は上野と繰り出して

棚の蚕の眠りふかぶか

平成五年七月二十三日 首尾
於 大原会館

之 子 彦 子 子 之 之 子 同 之 子 之 子

七五三

猪子 春治 捌

幼児に神の御加護や七五三

鳩の翔び立つ冬晴れの空

古備前の壺どっしりと据ゑられて

独り点前の厚き羊羹

佇^ウめばもとあらの萩照らす月

携帯電話爽やかな声

ヌーボーを君と酌みつつうつつなく

拓本の墨かすれかすれつ

街角で募金集める盲導犬

待ちかね新車やっと到着

猪子 春治

宮川 侑子

細川 研三

長谷川 芳子

武村 利子

杉山 壽子

大谷 規美子

丹下 敬子

田々宮かんばし

山頂^{ナオ}に入道雲と並び立ち

月も出ずして冷害の報

ふところの金は廓に吸ひとられ

弁天様の甘き誘惑

知らぬ間に塀の中まで迷ひ込む

どこまで続く政界の泥

ポケット^{ナウ}の陀羅助少しなめさせて

虻が友達俳諧師行く

花万朶遠き日しのぶ隅田川

旅の楽しさ語る春昼

平成五年十一月十七日 首尾
於 名古屋住友クラブ

し 芳 利 美 三 美 治 壽 敬 壽

波郷忌

バスを待ちふと波郷忌と思ひけり

荒磯の風に揺るる水仙

店先の漆ブローチとりどりに

聞こえぬふりで値切らせておく

再見うつあいちえんの老酒らうちゅうを酌む月の下

赴任の夫に送る浅漬

小説の不倫特集そぞろ寒

大人が夢中ドラゴンクエスト

開けゴマ自動ドアに畳む傘

電気鰻の鰭のひらひら

今宮 水壺 捌

倉本路子

佐々木有子

中西妙子

今宮水壺

路 有 妙 有 路 同

夏ナの月くだきて流す神田川

イメージアップはかる政治家

三猿にぼけ猿一つつけ足して

吐かせてみたい疵の数々

宗旨変へことばも変へてへばりつき

ノーサイドにてとけるスクラム

青空ナウに指笛高く響かせん

蜂が巣かけし新築の家

借景の山もぼつぼつ花みごろ

孫と遊んで永き日の暮

平成五年十一月二十五日 首尾
於 新宿角筈地域センター

妙 壺 有 同 路 有 妙 路 有 妙

藤の豊国

藤の風豊国の江戸遊び来て

綾のてふてふよぎる反橋

春厨呼ばはる声の誰ならん

好みのカップ紅茶いっぷく

尾根越えてまた細くなり杣の道

口づけだけで終る短夜

無蓋車の男にやりと月白し

すぐになるかなドルの百円

奪衣婆は三途の川に坐りだこ

泥でこさへた団子並べて

岩井 啓子 捌

岩井 啓子

豊田 好敏

久保田 庸子

武村 利子

敏

同

庸

敏

庸

利

ラグビーの延長試合酒すすみ^{ナオ}

ゴロスケホーホ梟の啼く

迷はずに教祖が決めし縁に生き

糸瓜のやうな彼と彼女と

妊るは五人目の児で秋収

月の射し入る銀細工店

波の音静か静かに寄せ返す^{ナウ}

異郷に住みて知りし人情

淡墨は我が想ふ花今盛り

毛を刈られたる羊軽々

平成五年四月二十五日 首尾
於 亀戸天神社

庸 利 同 庸 敏 同 利 庸 敏

夏隣り

踏石の形さまざまや夏隣り

巢立ちうながす親鳥の声

稿終へし窓に淡月いつしかに

会釈で通る管理人さん

洛^ワ中に未だ残れる登り窯

南無阿弥陀仏笈摺の背

ダメージの恋と知れども搔^カ抱き

ルージュくつきりギャマンの盃

風薫る回転扉擦り抜けて

番付表をかつぐ幕下

梅田 利子 捌

梅田 利子

篠原 達子

下坂 元子

雑賀 遊

長崎 和代

遊

元

同

達

代

汐^{ナオ}入りの池金色の鯉が跳ね

すっぽん鍋の食べ頃となり

横顔は手配写真によく似たる

女泣かせる更待の月

新絹の匂ふ絞りの長襦袢

仲のまつはるおくんちの客

旅^{ナウ}のルポ各社それぞれ競ひ合ひ

兎らと並びぬ喫泉の列

車椅子押しつ語りつ花吹雪

真昼の居間に舞ひ入りし蝶

平成五年四月二十八日 首尾
於 源心庵

達 遊 達 代

達 遊 元 代 遊 元

初懷紙

紅梅の一枝を卓に初懷紙

万歳太夫囃す門口

やんちゃ児の腕組みながら集ひ来て

大きな犬を撫でておあいそ

月^ッ天心秘蔵の銘酒独り酌み

ライバル多き恋は冷まじ

さはやかに世界に誇る妃生れ

にぎやかに鳴る教会の鐘

碧眼のスーク行き交ふカスバ街

てんとう虫を戴せる掌

金久保淑子 捌

東 明 雅

中 川 哲

本 屋 良 子

田 村 満 子

杉 江 杉 亭

金久保 淑 子

東 郁 子

小 原 正 子

亭

哲

はつぽつと夏沸瘡の出る頃となり

甲斐の山奥かくし湯の里

夢の夢栄枯盛衰ひとの世は

あなたとならばパンもいらない

暖炉燃え抱擁続く窓に月

九官鳥が突如沈黙

オープンナウのタレントショップひやかして

旅の用意に春のスカーフ

国宝の観音菩薩花の寺

亀鳴く池に消ゆるうたかた

平成五年一月十三日 首尾
於 鎌倉新田中

良 満 郁 良 哲 郁 正 郁 淑 満

西の市

酉の市紙の七福笑み給ふ

時雨上がりに響く売り声

すらすらと稿の進めばファックスに

しっぱ踏まれし猫の逃げ出す

秋鯖^ウの豊漁に湧く月の浜

娘は髪に芙蓉かざせる

契れども君は来まさず草泊り

煙草の匂ひ服にしみ付く

新総理ペンで指名の記者会見

お詫び上手も芸の内なり

神谷 安子 捌

神谷 安子

山崎 一恵

副島 久美子

八角 澄子

久

恵

澄

久

同

恵

涼^{ナオ}し氣に幟はためく演舞場

月射す卓に茹小豆食ぶ

拳銃を潜ませてゐる旅鞆

早撃ちアニー恋も早撃ち

網タイツ脱がすいとまもどかく

床に転がる酒の空瓶

来世^{ナウ}紀どんな爺様で居るのやら

ファンのどろかにＪリーグ追ふ

車窓よりみゆる山脈花の雲

寒冷紗張り育つ山葵田

平成五年十一月十日 首尾
於 池袋滝沢

澄 恵 同 澄

久 同 恵 同 久 澄

角切りや

角切りや泥にまみれしにはか勢子

観覧車より仰ぐ月の出

散り紅葉描くクレヨン選びゐて

ビーフシチューの匂ふキッチン

踏み台にひとりは掛けるふいの客

目くばせをして知らぬ間に消え

初めての接吻をする神の庭

夢でありしかホールインワン

金箔の沈む冷酒を贈らるる

魚偏づくし鮭の看板

倉本 路子 捌

竹田 登代子

増 渕 滋 巳

佐々木 有子

倉 本 路 子

中 西 妙 子

向 山 真 理

代

巳

路

妙

次の世も山本安英ことは織^{ナオ}り

パントマイムをパリの街角

屋根裏で猫のごとくにじゃれあひぬ

未婚の母と胸を張るなり

冬満月天の岩戸の深閑と

カメラ担いで西へ東へ

自販機^{ナウ}のスポーツドリンク半ダース

蝶の舞ひくる小児病棟

行きゆきて径細くなる花の寺

一絃琴に春を惜しみぬ

平成五年十月二十一日 首尾
於 新宿角筈地域センター

路 妙 有 代 有 路 已 理 有 理

流星の

流星の饗宴今日の連句会

半月の窓たたく松風

初なめこ籠いっばいに採るならん

貸自転車のパタルかるがる

合^ッ宿の酒は肥の国「美少年」

酔ひの勢ひ口説き饒舌

土手の陰送って行って送られて

鴉があさるポイ捨てのゴミ

「火の用心」ポスター歪む三の酉

年末までと約す行革

桑原 美津 捌

桑原 美津

副島 久美子

百武 冬乃

雑賀 遊

篠原 達子

小林 千雪

乃

久

遊

千

ナオ
するすると電気工夫の命綱

はるかに望む峯の連なり

新婚のオリエント急行ヴェニスまで

ピロトックから成りし小説

血の如き月に蝙蝠乱れ舞ひ

水虫薬つけてすっきり

ナウ
二歩前へくるり回ってレッツダンス

忘れ物なる春の手袋

花の枝濠にせり出しふぶきそむ

ママにおぶさり子遍路の夢

平成五年八月十一日 首尾
於 池袋滝沢

達 千 久 遊

達 乃 遊 久 千 達

椎の花

旅人のころにも似よ椎の花

岩のくぼみに掬ぶ真清水

画架立てて絵の具の彩を選ばらん

しりとり遊びにあきし子供ら

東京に残りし都電照らす月

より添ふ肩に降りて虫の音

そぞろ寒かすかに紅きキスマーク

ワーズワースの詩集縮く

琅玕の風さやさやとひろごりて

まだ決らぬか総裁の椅子

上月 淳子 捌

上月 淳子 翁

東 郁子

小林 照

石 渡 夢 八

上 田 溪 水

照

郁

溪

夢

鮫^{サメ}肝を肴に酌みて吟醸酒

月を映して雪の灯籠

小石さへ仏と見ゆる別れ道

一本杉に彫りしひとの名

衣摺れの音もろともに抱きしめ

ペア着てデインクスバリでバカンス

珍^{ナウ}しき鳥の研究半世紀

入学式に光る校章

来し方をつつみて遠し花明り

手から離れて泳ぐ風船

平成五年七月二十五日 首尾
於 山崎製パン厚生年金会館

照 溪 夢 郁 淳 郁 溪 夢 照 郁

時雨忌

時雨忌や船の牽きゆく大筏

千鳥鳴きつつ遊ぶ川波

子に習ふパスタソースの仕上りて

とりどりの色試すパレット

月^ウの下農村歌舞伎見栄をきる

薮に透ける額ひややか

愛拒む尼僧に迫るをそこへし

働きものの知能ロボット

核廃棄エリツイン呼べと民の声

異邦人らし地図を片手に

小林 千雪 捌

小林 千雪

中田 あかり

浅賀 淑代

権頭 和弥

金久保 淑子

代

り

代

弥

淑

夏茶碗薄茶の席の彫三島

稜線仰ぎ髪洗ふ月

思案して口説きことばの小抽出

妻のお出掛けリング外して

從滞中新車・中古車・盜難車

下の躰けのまだ足りぬ犬

少年のいっ氣呑みして老い易く

陽炎のなか夢を夢みる

西行を偲びて座しぬ花明り

階高くのぼりゆく蝶

平成五年十月二十日 首尾
於 深川芭蕉記念館

同 弥 同 代 り 代 弥 雪 り 淑

春一番

春一番ロダンの像の額を吹き

巣組みの鳥もとまどへる森

茹で上げる摘草の色鮮やかに

今日も定刻ジョギングのひと

シドニーのオペラハウスの肩に月

旅券拾はれ情身に入む

柳散る不思議なえにし異国夫

コロッケ、プリン、南瓜大もて

エステにも行けずに入る昼の風呂

母方遺伝低血圧症

五味 蓉子 捌

五味 蓉子

内田 麻子

瀬木 志津

今村 すま子

麻

蓉

麻

津

す

蓉

岩盤^{ナオ}の何処かがずれて冬の地震^{ない}

額の裏から落ちしへそくり

愛妻といふ名の箒買ひにける

いまどき律気子供六人

蟬丸忌月を仰いで琵琶法師

メロンいろいろ値段さまざま

地下鉄^{ナウ}の出口いづこも迷路めき

画廊探して銀座裏町

飲んでまた花見せんとやをさなどち

針魚がのぼる故郷の湖

平成五年二月八日 首尾

於 梶が谷房連庵

麻 津 蓉 津 蓉 津 蓉 津 蓉

秋の蝶

しばらくは袖にたゆたひ秋の蝶

野分の過ぎて仄と昼月

染め上げし老舗の暖簾爽やかに

国際電話声の近々

船^ウ白く港見つむるサングラス

恋ほろ苦くスタウトを飲む

きぬぎぬの涙と消ゆる絵蠟燭

聖母の像が仏壇の裏

土地と家この判押せば人のもの

一世一代大芝居打つ

文音

米谷貞子

原田千町

町子

子

町

子

町

子

町

異次元に通じる穴が一つ開き

地獄覗いた男達です

寒の月むかしの美女と河豚鍋

ペアで鳴らした銀盤の舞

アラベスク解けて縛れて絡まりて

お茶を濁して変はる政権

病^{ナウ}む夢の知らぬ山野をさまよへり

春の炬燵に伏せて西鶴

置かれたる埴輪の馬に花吹雪

髪をなびかせ漕げるふらここ

平成四年十月六日 起首

平成五年一月二十日 満尾

子 町 子 町 子 同 町 同 子 同

小春日や

近藤 守男 捌

小春日や小庭の空に雲一つ

散歩の途中気づく立冬

留守番にテレビ観戦楽しみて

時代が作るリズムありけり

夏の月風高原を渡りくる

泣き疲れては菖蒲湯を焚く

寡黙なる男は坐して晒巻き

香港製の時計行商

市民祭公民館に幟立ち

自由課題で土器を調べる

近藤 守男

佛 淵 健 悟

悟 男

男

悟

男

悟

男

悟

思^オはざる近きに鵲の高鳴きて

諸の蒸けたる香漂ふ

オートバイ月に手入れをする父か

紅引くひとのうなじ白々

あやかしに百数へさせ逃げて来ぬ

埋蔵金の夢ははじける

ヘブライ^{オウ}の文字で刻む神の意志

オアシスに舞ふ蝶々の群

花びらを杯に浮かせて歌ふらん

別れ様様弥生尽なり

平成五年十一月七日 起首

平成五年十一月十三日 満尾

男 悟 男 悟 男 悟 男 悟 男 同

色変へぬ松

色変へぬ松美しきけふの庭

月白淡く棹になる雁

厨窓料る秋鯖匂ふらん

声もはづんで電話ながかり

オーディション合格の友ニューヨーク

君の体臭なつかしき服

やうやくに失恋の傷癒えてきし

舐めるがごとく猫の世話する

討入りの日を待ち「笹や笹や笹」

備長炭の火の爆ぜる音

権頭 和弥 捌

橘 文子

副島 久美子

佐藤 正秋

遠藤 央子

権頭 和弥

久

央

久

秋

央

子どもらにへたな手品をせがまれて

ゼネコントップ終にボロ出す

特急の指定席券二枚買ひ

呼び捨てにされどっと汗噴く

かき抱き灯さずにをり夏の月

座敷わらしは天井に棲む

村おこし綱引き大会盛り上がり

山も笑ひて菰被り開け

花万朶ともに米寿の父と母

紀の道成寺鐘供養なる

平成五年十月二十三日 首尾
於 世田谷大原会館

文 同 久 同 秋 央 秋 文 秋 和 央

芽起しの

芽起しの雨の日覚めでありにけり

浅蜷汐吹く厨辺の箆

ふらここに興じる子らの声高に

スポーツ新聞スタンドで買ふ

あとさきになる犬連れて夏の月

簾の奥ににはやかなひと

こんがりと妻のやきもち愛ほしく

北斉漫画筆のおもしろ

相続税物納にして断られ

氏神様を祀るマンション

雑賀 遊 捌

雑賀 遊

下坂元子

中川 哲

豊田好敏

中村ふみ

佛 佛 健 悟

哲

元

ふ

敏

ナオ
ポリスマン白い手袋脱ぎ捨てて

世田谷檻樓市分ける雑踏

お見舞に行きしに床に引込まれ

ディープキスのいつ果てるとも

名月を浴びて鉄橋渡る汽車

方丈森と静もりて秋

ナウ
温め酒悔多き過去茫洋と

フレックスタイム頼るファックス

花万朶自販機並ぶお濠端

山脈近く百千鳥鳴く

平成五年二月二十二日 首尾
於 桃径庵

同 元 敏 哲 敏 元 遊 哲 ふ

梧桐

坂本孝子捌

梧桐の梢に雨のあがりけり

かみきり虫の動き出す頃

味見するカレーの辛さはどよくて

練習船の勤務にも慣れ

片笑くば異国の月にさらすらん

買はれし姫の文綴る秋

茜掘り歩みも軽く下る径

法燈絶えず鞘堂の内

「火の鳥」の手塚マンガの永遠に

定年しほに習ふパソコン

坂本孝子

式田和子

佐藤良弥

佛淵健悟

中村ふみ

悟

弥

孝

悟

同

爛酒の暖簾くぐれば人いきれ

選挙参謀どてら着て待つ

乱れ髪震度1でも抱きついて

汝を妊りし停電の夜

涼やかに月渡るなりチチカカ湖

連山はるか故郷はなく

拳玉の世界一周きめて見せ

絵舩字舩を奴舩追ふ

後ろ手に仰ぎぬ花の天守閣

蝾螺焼く香のぷんと来る磯

平成五年七月二十六日 首尾
於 桃径庵

み 悟 弥 み 孝 弥 同

芭蕉展

出光美術館

しのび寄る秋の深さや芭蕉展

玻璃戸を透す碧き夕月

家苞の柚味噌の蓋をあけかねて

ピアノレックスきりもなく弾く

異国^ウにて幼な馴染みにふと出会ひ

さようならとは言はぬ約束

酪農とサラリーマンと天秤に

UターンありOターンあり

人あまた拝むみ社神の留守

今川焼をふところの子等

佐藤 良弥 捌

秋元正江

東郁子

長崎和代

真田光子

佐藤良弥

光

郁

江

郁

代

告知してほんとによいかわからない^{ナオ}

やうやく戦終はる中東

飛鳥なるひと夜ひとりの月涼し

香のかをりは抱擁の暈

宇野千代の百二十五まで生きるとか

レミーマルタン爪で疵つけ

息づまる延長戦のホームラン^{オウ}

浄法寺椀満つる蛤汁

花吹雪夢食う獏に降りかかり

きっちりと祈る小さき紙雛

平成五年九月十二日 首尾
於 光ヶ丘近隣センター

江 郁 光 代 江 光 代 光 弥 代

行秋や

行く秋や三河俳諧史の卓池

月を高める雁渡るこゑ

土瓶蒸し松茸の香を確かめて

ファミコンぼうや鼻をひくひく

冬^ウざれのママはマニキュアくれなるに

家庭教師の彼にしたはれ

ご時世に乗りおくれちゃあいけないと

遺骨の戻る過労死の果

吟醸酒あっけらかんと父と母

窓明るみて動く初蟬

式田 和子 捌

加藤 燕雨

高橋 克郎

玉浦 カヨ

持留 直美

近田 順子

杉山 壽子

星野 かの子

福井 劫一

永井 江美子

広瀬 美子

綱取りの七月場所の猛稽古^{ナオ}

貸自転車のぎしぎしとなる

あやまちの跡の文字をぬぐひたし

嫁の荷物に涙たっぷり

出陣の鎧兜に月冴えて

峡にかすかにせせらぎの音

青春^{ナウ}に悔の残らず半世紀

眼鏡のつるにダイヤちりばめ

ピアノシモ時にフォルテの花吹雪

馬家はのんびり暮すうららか

平成五年十月三十日 首尾
於 豊田産業文化センター

森岡 しげる

佐野 陽子

杉本 明美

羽根田 富子

本屋 良子

近藤 徳枝

佐藤 良弥

武村 利子

大野 國士

窪田 薫

風の辛夷

青空へ歓声風の辛夷かな

蜂の巣箱にあふれたる蜜

雛の酒ガラスの盃で飲むならん

煙草とり出す縞の小袋

窓に月映しつ走る冷房車

どこからとなく匂ふ香水

二の腕に齒型うっすらこそばゆく

引越荷物他人まかせで

献金は入札順に整然と

回転木馬くるりくるくる

篠原 達子 捌

篠原 達子

副島 久美子

山崎 一恵

桑原 美津

久

恵

久

津

久

津

ナオ
クロワッサン食みつつひとりパリの雪

寺男つく組鐘カリヨシの音よ

私服にて不審尋問不意打に

待ちぼうけくふ真夜中の月

紅葉狩役者狂ひが鬼女となり

乾ききつたる鴟の早贄

ノウ
はせを句碑訪ぬる旅もはや果てて

ベンチに手話のはづむ指先

ジョギングの学生続く花堤

朝寝の床に聴きわくる鳥

平成五年三月三十一日 首尾
於 源心庵

同 津 同 惠

同 惠 久 同 惠 久 同 惠

聖 樹

なべて人優しく見ゆる聖樹かな

救世軍のラッパ嫋々

アトリエにイーゼルの位置定むらん

紅茶に垂らす洋酒一滴

月中天稿債いまだ片付かず

風船葛風のまにまに

嫁入りの馬にゆらるる刈田道

二筋三筋かかるおくれ毛

横文字のおみくじ受けぬ崇福寺

景気回復ままならぬまま

下坂 元子 捌

下坂 元子

豊田 好敏

雑賀 遊

永島 靖子

中川 哲

遊

靖

哲

遊

敏

裏庭に青大将の棲みつきて

夕焼空に仰ぐ織月

維納から巴里へ特急寝台車

ヴァンパイア吸ふ美女の柔肌

S Mの傷それぞれに恋の味

巻波くだけ海のとどろき

かの峠越ゆれば夢の昔あり

踏むんぢゃないよ濡れしものの芽

花散りて雀遊べる聲

鮎膾盛る手捻りの鉢

平成四年十二月二十一日 首尾
於 四宮会

靖 敏 哲 遊 敏 遊 敏 靖 哲

香嵐溪

紅葉のいよ増したり香嵐溪

月ももてなす遠來の客

秋狂言ことしは武者の役を得て

組立ての椅子そつと片付け

郊外に3LDKやたら立ち

散歩の犬が先に恋する

夢うつつ朝な朝なにルージュ替へ

精神科医のはやるこのごろ

まんばうの文士に似合ふ麦藁帽

無人の駅にひとり佇む

杉江 杉亭 捌

杉江 杉亭

稲垣 渥子

清水 一興

由川 慶子

月山 加寿

山田 早苗

斉藤 吾郎

精神科医のはやるこのごろ

まんばうの文士に似合ふ麦藁帽

無人の駅にひとり佇む

ナオ
ひげのない若き神あり礼拝堂

響き洩れ来るパイプオルガン

プチフル侯爵夫人のお好みで

白面の騎士立ちし冬枯

月かくし雪の影降る北の町

太郎は眠る次郎寝たかや

矢
崎

ナウ
謹直な元校長は畑仕事

玻璃戸にじっと止る春蠅

さみしさに花へ一献わが余生

遠足の児に乗り合はすバス

平成五年十月三十一日 首尾
於 豊田産業文化センター

加 興 亭 早

慶 藍 亭 興 渥 興

牛よ鳴くな

富士山の萱刈って来るぞ牛よ鳴くな

一筆啓上主秋興

やっとかめ棊子麵に月愛であひて

地下で音する駅の工事場

待ちあはす時計の針ののろのろと

ペアルックの鳥がかわいい

おみくじをつるんで引けば凶ばかり

子の土産物何にしようか

見学のBUSが寒ざむNHK

ゼネコン汚職つづく冬の日

杉山 壽子 捌

柴田 武

杉山 壽子

東 明雅

山田 歌子

武村 利子

長谷川 芳子

猪子 春治

田々宮 かんばし

吉川嘉次郎左衛門

宮川 侑子

暗闇で鍵探せよと善光寺^{ナオ}

背中合はせば走る電流

気つけ酒七十爺の踏ん張りか

遊女も寝まるひとつ大蚊帳

Jリーグ善戦照らす夏の月

橋のたもとでふいにつまづく

恐竜^{ナウ}が村の長者と首並べ

置かれし画架に風の光りて

花踏んで乙女の頃を惜しみけり

捨雛の頃夢の瑞西へ

丹下敬子

くのあや

治

芳

治

歌

利

細川研三

式田和子

門

平成五年十月二十七日 首尾
於 名古屋住友クラブ

椿の実

椿の実艶々太り関所跡

石に坐りて仰ぐ夕月

もてなしの新蕎麦筈に盛るならん

はしゃぎゐる児をそっとたしなめ

願^ウかけしトロール人形髪長く

デイトスポット地図を片手に

金もなく力もなくて色男

襲名披露宴のたけなは

吸入器御用済みなり棚の上

凍つるパリーへ旅立てる夢

須田 智恵 捌

須田 智恵

百武 冬乃

長崎 和代

副島 久美子

神谷 安子

乃

安

代

久

安

ナオ
四島が無理ならせめて二島だけ

犬がうろつく骨片が泣く

グラマーな発掘隊長てきばきと

ウインクしきり誘ふ片蔭

山の月汗の匂ひに昂りて

酒で忘れる過去の悶着

ナウ
寮歌祭ようかんいろの袴つけ

鯉木のうへ帰り行く鳥

人の波つづく墨堤花吹雪

記念撮影春日浴びつつ

平成五年十月十三日 首尾
於 池袋滝沢

乃 安 恵 乃

久 同 代 乃 同 久

梅雨の街

選挙カー走り抜けるや梅雨の街

歩道の鉢に咲かす射干

ていねいに折紙を折る子等のゐて

給食当番白衣おそろひ

青蜜柑^ウ匂ふ窓辺に昼の月

毬藻祭に始めてのキス

秋深し交換ノート未だ続く

新聞の記事震度3とか

職を去り有機農法ひと筋に

島を買ひ取り建てる仮小屋

副島久美子 捌

副島 久美子

山崎 一恵

百武 冬乃

恵

久

同

恵

同

乃

同

梟ナオがごろすけほうと訪ね来ぬ

月の光に集ふ蕪村忌

美濃・織部・萩・信楽と棚飾る

温泉の香にむせる坂の上

知り尽くす相棒の癖ベッドイン

家事全般は彼にまかせて

蔵出ナウしの地酒ふくめば饒舌に

戦傷癒えて寒も明けたり

空に舞ひ地に満つけふの花嵐

岩にちらほら鱒釣の影

平成五年七月十四日 首尾

於 池袋滝沢

乃 恵 乃 同 恵 久 乃 久 乃 恵

栗きんとん

ころもから栗きんとんを提げて来し

月にくつろぐ煎茶一服

かそけくも鳴くは蚯蚓の声ならむ

半透明の袋山積み

彫^ウり深き異國の人のたむろして

「好きだから」でも親の反対

神頼み占頼み子が出来た

F・A制度権利行使す

湾岸にレインボーブリッジ弧を描く

尉と姥とが紹で渡り初

高橋 信子 捌

式田 和子

高橋 信子

橘 文子

加藤 道子

松田 多恵子

久末 久子

道

和

文

久

ナオ
「つう」逝きて美しき日本語終りけり

化粧落とせば誰かわからず

テクニクだけで売ります私ブス

失恋同志呻る熱爛

お十夜の灯細し月の寺

地を這ふ様に犬の遠吠

ナウ
そらんじる詩集の手ずれなつかしみ

春の夢みて想ふ故郷

花守りにボランティアする大学生

穀雨に濡るる赤き駆動車

平成五年十一月五日 首尾

於 鎌倉中央公民館

多 同 和 道 久 文 多 同 信 道

青柿ひとつ

青柿ひとつまるび円空終の里

とうすみ蜻蛉とまる碑

P T A バザー出品揃へるて

廻すチャンネルどこもCM

駅員^ウの配る穂芒月今宵

面影ときに疼くかりがね

そぞろ寒年子五人目妊りぬ

ジャンボコロッケいつも売切れ

選挙カーここを先途のマイク戦

白髪の行司返す軍配

瀧川 雅代 捌

瀧川 雅代

八角 澄子

篠原 達子

長崎 和代

達

澄

和

代

和

澄

吊^{ナオ}るしたる鮫鰈の目のありどころ

月皓々と続く夜話

ネヴァ河の寄する川波ひそやかに

侯爵夫人円舞あでやか

抱き合ひ地獄天国どこまでも

瓦斯電気代取立てが来る

猫^{ネコ}のひげ引っぱってゐる定年後

盆地はるかに笑ふ山々

花見酒酌んで學術調査団

画帳傍へに春を惜しみぬ

平成五年七月十四日 首尾
於 池袋滝沢

達 和 澄 達 同 澄 和 達 澄 和

雲の峰

連衆の顔様々や雲の峰

片陰ぞひに急ぐ教室

将棋盤黙せしままに向かひゐて

白磁の皿に焼きたてのパイ

吉^ウ左右の文を待ちゐる小望月

軒の忍のゆるる切なさ

秋の蚊帳もぐりて遊ぶ兄弟

油絵の額壁にゆがんで

七党で政権めざす反自民

屋根の鴉にかあと嗤はれ

武村 利子 捌

式田 和子

大谷 規美子

吉川嘉次郎左衛門

松村 あや

深澤 孝位

丹下 敬子

宮川 侑子

美

門

や

鯖^{ササ}酒のうまさに心あたたまり

一角鬼子冬月に舞ふ

手をとって逃避行するゴビ砂漠

絹の靴下ぬけがらのごと

お前だけでなくとき文句にだまされた

親を背負ひて登る石段

ナウ
クラス会互に老を確める

観潮の渦広がるを見し

道の端のお地藏さまも花の下

若駒の群輝きに満つ

平成五年七月二十八日 首尾
於 名古屋ACC

位 美 仇 や 美 敬 位 門 や 敬

秋興や

秋興や四佳の一座のしんがりに

紅葉鮮やか床の大壺

月のぼり高まる瀬音聞ゆらん

單車で急ぐ英語教室

サ^ウブナード漂ふケーキの香に魅かれ

見つめ合ってるだけで幸せ

泣き黒子愛嬌黒子付黒子

占ひおばさん税の申告

佐保姫の天にいつはりなきものを

蠅も生るる蛇も首出す

橘

文子 捌

今宮水壺

橘 文子

佛 洩 健 悟

岩 井 啓 子

倉 本 路 子

同

壺

啓

路

壺

宝^{ナオ}てふぐい呑み並べへぼゑかき

冥土の旅はボサノバでゆけ

薪小屋に残し置かれし日記帳

伯爵夫人けふも眠れず

脱ぎ捨てて魔に委ねしや恋衣

郭公鳥の声の清しさ

緑陰^{ナウ}に眼から鱗を落つことし

田舎へ帰る還俗の僧

餅花の揺らぎ玉吐くパチンコ機

ラーメン屋台照らす寒月

平成五年十一月五日 首尾
於 赤鳥庵

路 文 悟 壺 悟 文 啓 悟 壺 悟

残照や

残照やひときは色を増して秋

月を心に蜉蝣の道

裂鱗母に習ひし腕冴えて

脱ぎ散らされた小さきスリッパ

ベルを押し子連れ布教の門毎に

問はず語りに来し方の恋

予約する十二単の婚衣裳

組閣の写真木々を背景

汗流し空瓶運ぶ若い衆

バンガローにはギャルのざはめき

田村 満子 捌

田村 満子

橘 文子

杉江 杉亭

橋野 代代子

高橋 信子

亭

文

代

亭

信

酔^{ナオ}った振り胸の谷間に埋めた顔

同床異夢でつれ添ひし果

早々と幽霊弁当売り切れて

狐の提灯ちらりちらりと

定廻り同心羽織弦の月

らりる社長は年貢納める

あ^{ナウ}の頃はおし戴いたララ物資

奥尻島に引鳥の群

見はるかす山脈遥か花霞

縁側に出てしゃぼん玉吹く

平成五年九月一日 首尾
於 鎌倉中央公民館

同 文 同 亭 代 文 代 信 亭 代

榧の実

榧の葉の榧の実を抱く山の駅

兄が追ひ廻す蟻蛸蠅螂

暈の月市の賑ひ片附けて

十六ビートジャズを聞きつつ

野良猫に煮干やらむか漱石忌

根津権現へ矢絣の女

今夜こそ帰さないよと耳元で

少し乱れし髪結び直す

渋滞を式場へ行くキャデラック

戒厳令の解けぬモスクワ

塚本 泰子 捌

塚本 泰子

五味 蓉子

内田 麻子

長谷 えみ子

麻

蓉

泰

え

麻

蓉

高飛込水面の月揺れ止まず

祖母のおはこの葛切が出る

小遣をあげるつもりが又貰ひ

つつい貢ぐ君は年下

ナルシスを囲む水仙名画展

キャンバスかかへ城趾の森

竹笛^{ナウ}を吹きて若さを懐しむ

制服好きで決める入学

花冷えの町寒気団居すはりて

東風にゆれつつ電線の鳩

平成五年十月十四日 首尾
於 梶が谷房連庵

え 蓉 泰 同 　　え 蓉 同 麻 泰 え

炎天や

炎天やひよろりと出でし街静か

しぶき四方に高き噴水

嬉遊曲メトロノームの刻まれて

縫ひさしのまま※プチポアン見せ

満ツ月に望みのすべて言ふてみん

関白邸に香る秋蘭

君が踏む交野の野辺に蜻蛉まふ

ピリカメノコの眉の凜々しく

民族の権利求むる国際年

旗ひるがへる壁のうちそと

文音

椿 紀子

吉村 恵美子

浅賀 淑代

紀

恵

代

紀

恵

代

紀

ナオ
塩加減少し控へめ寒の味噌

ひとにつられて嚏する月

紙芝居はらはらどっきりまたあした

巖上に立つ魚籃観音

夢うつつ羽化登仙の抱きごこち

毒入りテキーラ口移しする

ナウ
五十年アルカトラズにジャージ着て

雪まだ残る遠き連峰

幼らも花を挿頭せりはなしづめ

種吹きいれて飛ばす風船

喜
フランス刺繍

平成五年七月二十六日 起首

平成五年十一月十六日 満尾

恵 代 恵 紀 代 紀 恵 代 紀 恵

紫蘇の葉の

紫蘇の葉の母の匂ひや夕支度

夏座敷には遠来の客

滴々と水琴窟を鳴らすらん

たたなはる山借景にして

六道の辻に詣ると月の道

木槿垣から濡れ場ちらりと

残り蚊もさすにさされぬ古女房

慣れない仕事うぶな殿様

打首にいたせ賄賂もセクハラも

自然の猛威有無をいはせぬ

文 音

椿 紀 子

佐藤 良 弥

子 弥

子

弥

子

弥

子

弥

ナオ
月照らす黒部のダムの初氷

毛糸をほどく長椅子の上

かな釘の文いつしかに胸を打ち

クレオパトラが誘ふ舟旅

ビザンチン夢の果たせぬ城悲し

酒盃嘗のつつ小羊を焼く

ナウ
いましばし生の喜び給へ賜へ

風車売ならぶ境内

息深く紋服正す花万朶

草餅のいろ濃きも淡きも

平成五年七月二十日 起首

平成五年十一月十四日 満尾

子 弥 子 弥 子 弥 子 弥 子 同

鳥雲に

武蔵野のゆるき起伏や鳥雲に

径たどればかほる春蘭

雛の客小さき手揃へおじぎして

厚き画集のテーブルの上

月^ウ寒し湖を見下すブルーシャトー

毛皮の夫人逢瀬忍びぬ

不景気に貢ぐ宝石ままならず

引越先も賽ころで決め

風の音五線に綴る作曲家

忽ち空の到来の酒

長崎
和代
捌

長崎和代

瀧川雅代

梅田利子

村田富美

代

美

子

代

子

美

ナ
オ
蟻の列何の骸か群がれる

日本いちめの好きな長官

たて板の甘き言葉もそつがなく

毬藻祭に熱きくちづけ

有明の開拓原野牛生まれ

針目揃ひて秋袷縫ふ

ナ
ウ
毀譽褒貶のれん守りて迎ふ古稀

皿鉢料理の葉味たっぷり

花の旅あまた仏を拝みたる

朝寝の夢に母の優しき

平成五年三月三十一日 首尾
於 源心庵

子 美 和 代 美 子 代 子 代 同

寒木瓜や

寒木瓜や名の木しづもる庭の彩

賓客待てば応ふ笹鳴

河悠悠筏を漕ぐは誰ならん

子を吊り上げて登るきざはし

ア^ウッシジは眉月かかる十字架に

抱き合ひつつ踊り手となる

あら走り一つの盃に頬よせて

いつ迄続く佐川問題

かにかくに外人横綱誕生し

名馬育てる日高牧場

中島 啓世 捌

中島 啓世

竹内 晃

橋本 正二

森 玲子

橋本 まき

竹内 知子

晃

二

玲

き

雲の峯輝きてをりレモンティー

夏の霜透く廃船の骨

縄のれん軍歌蜜声きらわれて

規矩準縄に馴れて駆落ち

合同の結婚式は仏式で

エステティックに苦情続続

からくりの人形お茶を運び来て

お水取りまで肌をさす風

花守りのあけくれ永し鰯飼ひ

丘を下れば蝶のつれ舞ふ

平成五年一月二十日 首尾
於 藤沢 竹内家

知 晃 二 玲 き 知 晃 二 玲 き 知

水 母

汐の色透ける水母や東京湾

避暑客のせし出船入船

ネヂ巻けば時計の針の嬉しげに

ミックスナッツ味はいろいろ

満月^ウに人待ち顔の着流しで

思草めく義姉のまなざし

秋濕線刻観音道の端

拾った猫に振り回される

おこぼれに上目遣ひですりより来

テレビで笑みを競ふ政治屋

文 音

中 田 あかり

武 村 利 子

子 り

り

子

り

子

り

子

マスクかけ言葉ガーゼにぶつかりぬ

この病名を隠し通さむ

蜘蛛の罅の斜めに見ゆる下り月

週刊紙記事題は大げさ

ホイリゲでワインに体溶かされて

深情にて渡る吊橋

「おばあちゃん」他人に呼ばれ誰のこと

税申告の文字の細かさ

秀吉の生まれ在所の花明り

農具市立ち筈一つ買ふ

平成五年五月二十八日 起首
平成五年八月二十六日 満尾

同 子 り 子 り 子 り 子 り 子 り

磯菊や

橋野代子 捌

磯菊や岩礁しぶく波頭

橋野 代子

海人の苦屋に月の皓々

金久保 淑子

秋小寒む衣一枚重ぬらん

蒲原 志げ子

父の帰りを待ってはしゃぐ子

松田 多恵子

カクテルはペパーミントのうす緑

岩垂 景翠

ウインナワルツで初のステップ

多

厚化粧剥けたる妻に仰天す

淑

雨戸がたがた鳴らす夜あらし

翠

不毛作つけ入る刻ぞ米議会

代

囚籠下げ登る裏山

志

作^{ナオモ}麼生と畳み掛け来る冬安居

李朝の壺の少し歪みて

ファックスで来るラブレター誤字脱字

幼妻には婿若作り

月登り祭太鼓の乱れ打ち

貨物列車の擦れ違ふ駅

U^{オウ}ターン捨てたつもりの故郷に

名代草餅婆の手づくり

このところ花の留守番猫の役

衣桁春着に蝶の動かず

平成五年十月六日 首尾

於 鎌倉中央公民館

同 翠 淑 志 多 代 同 翠 淑 志 淑

青梅雨の

青梅雨の昼を灯せる涵徳亭

河骨の黄を活けし水盤

ワープロの変換ミスにやや慣れて

キャッチボールの声弾みくる

居^ウ待月讃岐の山のみなまろし

野ぶだうの香に君を想へり

秋祭り女座長の目千両

仕事一途でとんだ堅物

飼ひ猫のまつはる卓のワンカップ

サミット過ぎの車混み出す

原田 千町 捌

紅露 ゆき子

原田 千町

町 淑子

須賀 一恵

延平 いくと

ゆ

と

淑

恵

ゆ

詩人ありて仏蘭西遠しと詠へりき^{ナオ}

血潮吸ひたる石畳踏む

据膳に毒盛られたる夢を見し

王昭君を送る凍て月

逢ひにしを互ひに数ふ古曆

アルトサックス高く響ける

遊行寺の行よりも遊占ひ師^{ナウ}

六瓢息災蜚汁吸ふ

咲き満ちて雲に溶けゆく花の里

垣根隠れに春の絵日傘

平成五年七月十二日 首尾
於 後樂園涵徳亭

と 町 淑 と ゆ 淑 恵 淑 同 恵

青 葉

象頭山御目やさしき青葉かな

麦秋の野を横切る街道

ニューモードブティックの窓飾るらん

揚げたてコロッケはふはふと食べ

宿直^ウの更けて湯浴みの月と我

水門開けず二百十日も

淡き恋舞ふ蜉蝣に誘はれぬ

嫁きしと聞ける哀しみもよき

ノイズしてハムの電波のやや乱れ

P K O は丸腰のまま

膝送り

原 田 千 町

大 窪 瑞 枝

坂 本 孝 子

町

枝

子

町

枝

子

町

飢^ナゑし孤兒乳湑るる寡婦国にみち

寒の月光受くる鉄鉢

襦袍着てテラ錢ずしり懷に

魂をとろかす閨のあしらひ

老いぬれば酒は媚薬か眠剤か

一艘を置き暮れかかる海

北^{ナウ}齊の記念切手を旅だより

燕巢作る頃の忙しさ

バーコードレジピピと鳴る花の昼

金平糖をこぼす春泥

平成五年五月十一日 首尾
於 高知バス車中

子 枝 町 枝 町 子 枝 町 子 枝

水の奥

爽かや翁尋ねし水の奥

早稲の香の高き昼月

冬仕度机の位置を変へもして

ガラスケースに入れる人形

恐竜^ウの化石の卵競売に

若きふたりの旅券整ふ

地球儀を廻しひろがる甘き夢

景気浮揚にかける国会

神の留守狛犬宙をにらみをり

心で漉けよ紙漉のこつ

東 郁子 捌

東 郁子

井上 達磨

小林 しげと

芳田 龍子

杉内 徒司

影沢 与六

岩田 トメ

磨

メ

磨

滑^{ナオ}り台生徒五人の分教場

瀬戸内の島大漁に湧き

口移し度を越す「富貴」純米酒

嘘をつくのがうまい羅

月青き名刹仏法僧の鳴く

腰の痛みの時に気になり

年^{ナウ}寄は使ひこなせぬGコード

風のまにまに初蝶の舞ふ

見はるかす一目千本花がすみ

皿に盛りたる草餅の彩

平成五年九月四日 首尾
於 新庄市民プラザ

龍 司 龍 司 と 司 龍 磨 と 龍

冬 鷗

冬鷗葛西の橋の長きかな

藍深みたる大寒の水

厨辺に野菜さまざま刻みゐて

口笛かるく機嫌よき子ら

奥^ウ山の五百羅漢に月のさし

石榴の下で交す恋文

今年絹着こなせし娘と連れ立ちぬ

守衛てきぱきホスピスの前

抱きあげる仲とそっくり皺の顔

質草値ぶみ案じるとき

百武 冬乃 捌

百武 冬乃

秋元 正江

下坂 元子

須田 智恵

下鉢 清子

元

清

江

元

江

古^{ナオ}渡りのギヤマン紅き酒そそぎ

月煌々と渡るバルコン

汐騒は人魚の嘆く歌ならん

夢を重ねし閨の乱れに

妻と妾一緒に住ませ聖一は

燃えないごみにまじる生ごみ

バーベルのどしんと落ちるジムの床^{ナウ}

虻追ひ払ふ窓広くあけ

花の雲弥撒へと急ぐ坂のうへ

畦に憩へる耕しの人

平成五年一月二十七日 首尾
於 源心庵

清 乃 恵 元 同 江 恵 元 恵 清

青あらし

青あらし「土佐鶴」乾すが男ぜよ

別れつらさに隠す帷子

デジタルの時計つぎつぎ移りゐて

進学塾のしんとしづかに

素謡^ウを口ずさみつつ月の坂

紅葉をかざす腕うつくし

プリンスの誠実受けて秋闌くる

饗宴の灯の点りたる窓

舐め回ししきりと猫の毛繕ひ

掃除すませて拝む野仏

福井
隆秀
捌

福井隆秀

友永幹子

幹秀

秀

幹

秀

幹

秀

幹

飛行機も新幹線も嫌ふ祖母

一党支配終に交代

冴ゆ月にひたすら亀の冬眠す

接吻ひしと雪のカチューシャ

ふたたびの胸の鼓動の高鳴りて

肝臓病と医師の託宣

真^{ナウ}っ白いカーテン風に膨らみぬ

家持偲び雲雀悲しも

年ごとに花のあはれの深まれり

娘は春服を着けて颯爽

平成五年六月二日 起首

平成五年九月二十八日 満尾

同 秀 幹 秀 幹 秀 幹 秀 幹 秀 幹 秀 幹

涼新た

死ぬまでになすことなさん涼新た

出航の銅鑼照す月影

秋団扇踊る人々夜も更けて

ほっと一いきお茶を一服

教会^ウのステンドグラス彩の美し

細きうなじの真珠大粒

なれそめは学園祭の女王から

犬はわんわん猫はにゃあにゃあ

かつがれた殿様の興寒々と

きゅうと独りであほる熱燭

細川 研三 捌

細川 研三

長谷川 芳子

浅井 沙衣子

くのあや

宮川 侑子

芳

三

衣

芳

侑

オ
Jリーグツーステージも大暴れ

三浦てふ名の幸不幸あり

老ゆるまで共にと甘きくちづけを

恋と風鈴ゆれて知らるる

夏月のかかる穂高に登りつく

はいまつの蔭雷鳥を見る

ナ
写真帳若き姿の父と母

庭にひろがりしゃぼん玉飛び

花万朶校舎の中をにぎはせり

金のしゃちほこ遠足の子ら

平成五年八月二十五日 首尾
於 名古屋ACC

三 仇 や 衣

三 仇 芳 や 衣

黄金比

炎天や聖俗にある黄金比

モノクロームに揺らぐ噴水

飼ひ鳥のやうやうに馴れつつくらん

書留ですと郵便夫佇つ

美術展良き値付きたる裸婦の像^ウ

ブラディメリー髭汚す月^{※※}

うとまれてうそ寒の部屋寝ねずゐて

六尺廊下鼠駆けゆく

DNAのぞき創造主の声を

即席ラーメンコンビニで買ふ

文音

佛 洩 健 悟

浅 賀 淑 代

代 悟

代 悟

代 悟

代 悟

ナオ
引き当てしハワイ旅行に子らも連れ

海に沈みしままの砲艦

墨染の尼御前いまだ三十歳とぞ

莫蔭にころがる賽の目を追ひ

狂恋と碎ける月と冴と

霜柱踏むハイヒールなり

ナウ
村おこしUターン族のアイディアで

春期講座に交はす挨拶

「運命」を心静かに花の午後

玻璃戸叩いて蠅が生まれる

★ ウォッカをトマトジュースで割ったカクテル

平成五年八月二日 起首

平成五年十一月十九日 満尾

同 悟 代 同 悟 代 同 悟 代 同 悟

雪解富士

横浜の開港記念雪解富士

夏潮を曳く白き帆船

菓子を焼くコック忙しく働いて

帰り支度の裏木戸に猫

月中^ッ天門限少し早すぎる

ベンチに冷えし手を重ね合ひ

菊枕病名つひに告知せず

数年若く描く自画像

写真集われもわれもと出版し

透明な空映す湖

本田八重子 捌

式田和子

向平律子

本田八重子

増田泰子

松田多恵子

泰

和

泰

多

泰

聖^{ナオ}樹はや百灯ともす大通り

優勝パレードラガー先頭

酒蔵に下戸の続くは家系なり

大盃を干す美しき花嫁

月暗し蛇身ぬめぬめ迫り来る

恩給証書失ひし夢

思^{ナウ}ひきりお洒落して行く記憶の地

駅に巣づくり燕舞ひ飛ぶ

藤娘孫の踊りに目を細め

春の苺を添へし弁当

平成五年六月二日 首尾
於 鎌倉中央公民館

律 多 和 泰 八 和 律 多 同 律

秋 暑 し

秋暑し子のはづむ声始業式

宿題帳のやっかいな虫

観覧車月のせ海へ廻るらむ

袖看板を直す労務者

飲^ウむ程に身振手振のコップ酒

異国の美女にちよつとアタック

香煙の魔窟の愛に溺れ込み

目覚たところ三田の芝浜

議長席座りごこちは如何です

もがり笛には籠もる哀愁

松田多恵子 捌

松 田 多 恵 子

加 藤 道 子

向 平 律 子

豊 田 好 敏

増 田 泰 子

多

道

敏

律

泰

初弁天小錢を洗ふざる選^ナび

南無阿弥陀仏他力本願

彼となら死んでもいいと泣く娘

薔薇百本の届く毎日

夏館老いし執筆の背に月

仔牛のやうな犬ののっそり

ワグナーのオペラチケット前^{ナウ}売で

フランス料理春の香をのせ

山ぐるみ花の衣を着た如く

小綬鶏出逢ふ里の杣道

平成五年九月二日 首尾

於 鎌倉中央公民館

律 敏 律 泰 敏 道 律 多 道 同

木 槿 垣

木槿垣目礼交し過ぎにけり

卯建の端にかかる三日月

うそ寒に衣縫ふ針をふととめて

皿にわけたるし・しのピザ

ポケベルを鳴らし続けて憩ふひと

優柔不断剛毅小心

どうしてもときめきませんこの見合

ふるさと恋し津軽じょんがら

あの山の麓鷹匠棲むといふ

残業の灯の冬のアトリエ

水 鳥 ま す み 捌

水 鳥 ま す み

秋 元 正 江

村 田 富 美

倉 本 路 子

真 田 光 子

小 林 千 雪

路

光

江

光

地母神^{ナオ}をまつりて例の燥となる

封を切れない辛口の酒

颯爽と議長の席のおたかさん

千両役者水着姿で

抱擁を月かうかうと葭簾

人語を解す老猫のゐて

忌^{ナウ}に集ふ子等の成長著し

倫郭郊外春の土踏む

ゆで卵くるりとむいて花の昼

かいやぐら立つはるかなる湾

平成五年八月十八日 首尾
於 文京区勤労福祉会館

江 路 光 美 雪 江 み 雪 美 同

灯 牙 ゆ

灯牙ゆ潮入川に小波立つ

ひしひし凍る人氣なき街

湯気の奥調理場に太き声とびて

多機能ファックス未だ使へず

ボーイング修理延々バリに月

青銅の鈴冷えし後朝

刈田道素知らぬ振りで行き違ひ

二軍おちにて臥薪嘗胆

看板の猿は陽気な芸達者

バンジージャンプ悲鳴あげつつ

文 音

峯田政志

若松隆一

一 志

一 志

一 志

一 志

一 志

一 志

酒壘^{ナオ}を枕に無頼派気取にて

時を得顔にひきがへる這ふ

婦警らの夕月仰ぐ夏名残

あそびの筈が恋の虜に

いつまでも体の芯にジャズの熱

環状線の果てもなき旅

どの山^{ナウ}も雨後の優しき貌を持ち

子等慕ひくる棕櫚の日曜

高窓を開けて眩しき花万朶

煙の輪吐きのどかなる縁

平成五年十一月十五日 満尾

同

志

一

志

一

志

一

志

一

志

立春の

立春の神餅舞樂殿を占め

背伸びして見る冴返る中

摘草の童の産毛輝きて

丘の向ふは原発の海

手^ウ花火の玉の落ちたるあとの月

団扇に隠す熱き語らひ

年上の女ときには深なさけ

壁にかかれる小牡鹿の角

ベネチアの骨董市でランプ買ひ

徹夜して読む推理小説

文音

本屋良子

川治敦子

松村あや

成瀬貞子

柴田由乃

船渡文子

敦

良

貞

や

凄^{ナオ}みたるおんぶお^ナばけの雪に消え

寒のかりがね列を乱して

気があるの誰かこ^ナっちを見てゐるわ

指をからませ語る初秋

喧騒の東京駅頭月濁り

温め酒にむせぶ浮浪者

癒^{ナウ}着せる腹のあちこち手術あと

奨学金で親と離れる

桜吹雪税のあがる和紙の町

空に消えゆく双つ蝶々

平成五年二月五日 起首

平成五年四月五日 満尾

敦 貞 文 乃 貞 や 敦 良 乃 文

今朝の冬

つくばひの水音清し今朝の冬

石路咲きそろふ庭の片隅

折紙のコースターなど作り居て

S F アニメ熱中の児ら

獅子吼えの街つき抜ける月の下

りんご食みつつ眺む裸婦像

やや寒の理科室ひそと肩を抱き

ワープロのせい恋文の誤字

金丸座同時通訳間に合はず

所得減税消費増税

八代

嫋 捌

八代 嫋

吉村 恵美子

橘 文子

佐藤 良弥

宮坂 和三郎

浅賀 淑代

文

恵

淑

弥

ナオ
なむまいだ殿様頼み神だのみ

月涼しくてガムランに酔ふ

影映すサマードレスの一人旅

田中裕子にどこか似し女

みてくれとがらり違ひし閨のなか

浮世絵漁る老の道楽

ナウ
富士山の伏流醸す美し酒

蜂を育てる兄弟の夢

昼休み少しのばして花たづね

莫蔭に座りて集ふうららか

平成五年十月十三日 首尾
於 朝日カルチャー

文 淑 和 恵 弥 文 弥 嫺 恵 和

燕 帰 る

この年の減りし燕も帰りけり

夕月ほのとのぞく山の端

醸したるワインの自慢それぞれに

何処行かうか明日のドライブ

優^ワ型の新任教師もてにもて

背伸びして受く長い接吻

引く潮の洗ひて行きしうつせ貝

麻葉の味に勝てぬ天才

神留守の縁に寝そべるぬけぬけと

逆さまに吊る冬薔薇の束

山 口 み づ ゑ 捌

山 口 み づ ゑ

内 田 麻 子

上 月 淳 子

高 瀬 美 保

須 田 智 恵

森 本 郁 子

淳

恵

淳

麻

ナオ
アンダンテ・カンタビレの流れ来る

歯科医の椅子に開ける大口

膝まろび落ちたる猫を抱き上げ

ちちんぷいぷいなり立てのママ

大雷雨切っても切れぬ仲となり

わたしあなたの小待草です。

ナウ
オリンピック北京シドニーデッドヒート

池の澱みに亀の鳴く声

月おぼろ媼機織る花衣

若布を入れて握るおむすび

平成五年九月二十三日 首尾
於 房連庵

美 同 郁 麻 恵 美 麻 郁 美 淳

秋風

橋半ば来て秋風とおもひけり

ガーデنبルに懸かる初月

美術展入選の友祝ふらん

黒楽碗で薄茶いただく

着^ウ流しの後姿は吉右衛門

のりの岡惚れ今恋仇

神田川手をととりあつて銭湯へ

野良猫さつと道をよこぎる

自民党野党にvariこの冷夏

今年はじめて脱いだすててこ

山田歌子捌

山田歌子

武村利子

田々宮芳

田部みどり

榎本てるの

利

り

芳

の

り

ナオ
教へ子の自慢話に酔ひまわり

乗換え駅のホーム混雑

捨小舟砂浜に曳く影二つ

ハイレグ水着波に抱きあふ

夏の月ドラキュラ牙を磨きゐて

暁に鳴る教会の鐘

ナウ
故郷の町に思ひ出探しをり

頬杖ついて春惜しむ友

花吹雪苑の幔幕ふくらみて

ワルツの調べ舞ひし麗日

平成五年八月二十五日 首尾
於 名古屋ACC

利　　り　　芳　　の　　り　　の　　芳　　り　　う　　利

年用意

鬼もきて手伝ふ婆の年用意

あつといふまに終はる煤掃き

こぎん糸五色づかひに縫ひ上げて

街に繰り出すパレードの列

楽隊^ウのバトンの先に昼の月

林檎の頬に残る幼さ

秋祭頭屋の嫁の忙しく

酒盛りぬけて逢引きの味

あたたかきサウナの中の夢心地

飢ゑて泣く子の絶えぬ世の中

文音

吉村 恵美子

沖津 秀美

乗杉 瑛子

本屋 良子

中西 道枝

恵

美

瑛

良

枝

豊漁^{ナオ}の鯖鯉烏賊飛魚

明るき月の覗く青蚊帳

チャイム鳴り不意にあらはる訪問者

言ってみたいな殺し文句を

全力で君を一生守ります

男いろいろ女いろいろ

からっぽ^{ナウ}の箱から鳩を取り出して

風昇りては点となる空

花万朶堂より漏るる阿弥陀経

睡たき午後の蝶をみてゐる

平成四年十二月十一日 起首
平成五年二月十八日 満尾

恵 美 瑛 良 枝 恵 恵 美 瑛 良 枝 恵

◇ 半歌仙 ◇

紅枝垂

もつれてはほぐるるころ紅枝垂

春あたたかき東屋の榻

猫の子を膝から膝へ送るらん

珙瑯鍋で煮つめゐるジャム

風紋の砂丘に昇るまるい月

列の続きて蟻穴に入る

運動会^ウパパのはりきるビデオ撮り

わたしと同じカメオブローチ

仏にも夜叉にも恋は七変化

土用鰻にするり逃げられ

真田 光子 捌

真田 光子

秋元 正江

水鳥 ますみ

小林 千雪

村田 富美

倉本 路子

み

江

み

路

齒科・産科・耳鼻科・眼科のなんでもや

小笠原島けふも欠航

寒の月酒盛りいまや酣に

絣紬に懷手して

毀誉褒貶この世のことはあるがまま

コードレスホン新聞の下

合唱は滝廉太郎「花の曲」

雉の尾見ゆる築山のかげ

平成五年四月二十七日 首尾
於 文京区勤労福祉会館

み 雪 江 美 同 み 雪 路

◇
百
韻
◇

百韻 處暑といふ

膝送り

迷ひ込みしか穴出し蛇
事始所信表明新首相

コンピューターで春の月描く

裂織の紐の背負籠を畦に置き

胡麻いっぱいいの南部せんべい

しゃべりだす外人変な関西弁

鬱から躁へ切り替はるとき

餅花の影の揺らめく青暈

炉端で聞きしきのふ見た夢

北^ニの旅雪の空港降り立ちぬ

妖精が好きイエーツが好き

繊細な筆先皿絵彩られ

笛方の家塵ひとつなく

許されぬ恋を貰く嬰のため

抱きとめらるる寒の戻りに

雁風呂の枝集めきし夕まぐれ

よなばこりして還る兵卒

知命にて将棋名人射止めたり

處暑といふ道玄坂を登りけり

木槿咲きたるブロックの塀

二科展へ搬入のひと月浴びて

脱ぎし上衣に小銭ちゃらちゃら

掛時計電池いれ換へ頼む母

そしらぬ振りで欠伸する猫

栈橋にボート置き場の空きありぬ

若き牛蒡をさがきにする

風に乗る園児の声の賑やかに

数珠をはづした和尚先生

握られし手の軟らかく大きかり

エステ通ひが癖になりさう

駅前の雑居ビル地下エレベーター

敏 雪 淑 志 達 敏 江 志 達 雪 敏 江 淑 志 達 敏

盆栽組合上野山下

A^あB^あA^あB^あで中古ジーンズ試着して

横目でにらむ禁煙の札

宵月夜建前やっと始まりぬ

爽涼の酒果つるなき宴

邯鄲^うを聞きに泊まりし御獄なる

日本武尊を祀る古塚

沢瀉屋十八番の外連にて

赤いボルシェでゴルフ三昧

やあさんと共に法律まなぶ席

円高弗安つづくこのごろ

掛け香に甘き言葉で誘ふ姫

蘭鑄のごと迫りくる顔

フェミニストいざといふ時意気地なく

逆探知する電話旧式

貫ひたる元麻葉犬嗅ぎ廻り

不精してます洗濯の月

盆路を刈りて迎へし花灯笼

江

淑

雪

達

志

江

敏

雪

淑

志

達

敏

江

淑

雪

達

志

江

オリブの実の熟るる島々

フルートのトレモロひびく西洋館^三

落款を見て壁の絵を褒め

ほんとかな千人斬りのあの噂

おっと危ない嫂の裾

香港の飲茶しげしげ通ひたり

救急車来て停まる路地裏

野次馬をたちまち捌く助監督

サンダル履きの下足番ゐて

夏休み子等は実家に送り込み

訪問販売買ってしまった

小名木川芭蕉稲荷の旗なびき

日永にめくる江戸の洒落本

マラソンのランナー包む臘月

雛市の立つ廃校の跡

やよ鴉畑荒らすな種掘るな^ッ

媼の語る民話訥々

陣笠の議員も混じるニュースショー

敏

雪

淑

志

達

敏

江

淑

雪

達

志

江

敏

雪

淑

志

達

敏

ランチメニューに珈琲が付き

渋滞の高速抜けて料金所

濡れた女がじっと佇ってる

楳明り月も斜めに肌合はし

他人^{ひと}のものとする先がない愛

書き直す遺書数箇条あれこれと

釣ることもなしに垂らす釣針

気象庁地震予報に洩れた島

パリ転勤で支店長とか

まなうらに花残りけり滝桜

遠蛙聞き心地好き床

^{ナオ}人麻呂忌和泉式部忌小町の忌

袋回しも今やたけなは

ポケベルが置いた鞆の中で鳴る

ペットショップはいつも覗いて

古切手集めて贈る義手義足

海賊船の髑髏帆柱

あえかにも冷たき美女を横抱きに

江

淑

雪

志

達

江

淑

雪

敏

志

達

敏

江

淑

雪

達

志

江

^{じよま}上品味はふ初弥撒の堂

毎食にベータカロチン繊維質

たまるチラシは丸めゴミ箱

没ばかりやと特だね掴みたり

発掘現場鳴いてゐるけら

書割の臥待月の舞台裏

秋の扇をぼんと投げつけ

^{ナウ}熱気球アルプス越えに挑戦す

高所恐怖に効く薬なし

清貧の暮らしと言ふにほど遠く

真向法の免許皆伝

故郷の寢覚めは友と墓家にて

古民具さがす町の道具屋

揚げ花火つひは仕掛のナイアガラ

初時鳥聞きし連衆

平成五年八月二十三日 首尾

於 東京渋谷むつみ会会場

敏

雪

淑

志

達

敏

江

淑

雪

達

志

江

敏

雪

淑

あ と が き

『猫蓑作品集Ⅳ』をお届けいたします。

会員の増加並びに、夫夫の連句会場に於ての研鑽が作品応募に反映して、二百三十ページの大冊となりました。今回は明雅主宰ご考案の二十八韻「源心」が新しく加わったものです。先にご考案の二十韻は既に滲透して、忙しい現代人に愛されておりますが、歌仙と二十韻の中間が出現したことで、益々バラエティーに富んだ内容となり楽しくなります。連句歴厚い方々にも日の浅い方々にも、良い参考作品となることでしよう。

来年は第五号の上梓をと考えますとき、五は一つの節目、主宰の序文にもありますように、作品内容を考える時期になることと思います。文芸作品としての連句を成すことに一層の努力をしたいものです。

今回の校正には秋元正江様ほか「つぼみの会」の方々、瀧川雅代、須田智恵、桑原美津、久保田庸子、長崎和代、神谷安子の諸氏にお手伝い頂きましたこと、感謝いたします。

一月下旬

下 鉢 清 子

猫蓑作品集 IV

平成六年三月吉日

発行人 東 明 雅

発行所 猫 蓑 会

定価 一、八〇〇円（送料実費）

印刷所 株式会社 岩田印刷



